

秋田県文化財調査報告書第461集

上 谷 地 II 遺 跡

—一般国道7号象潟仁賀保道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I —

2 0 1 0 • 7

秋田県教育委員会

シンボルマークは、北秋田市浦田白坂（しろざか）道路
出土の「岩偶」です。
縄文時代前期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。

かみ や ち
上 谷 地 II 遺 跡

—一般国道7号象潟仁賀保道路建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書 I —

2 0 1 0 • 7

秋田県教育委員会

序

本県には、これまでに発見された約4,900か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これらの埋蔵文化財は、地域の歴史や伝統を理解し、未来を展望した彩り豊かな文化を創造していくうえで、欠くことのできないものであります。

一方、日本海沿岸東北自動車道をはじめとする高速交通体系の構築や国道の整備は、地域が活発に交流・連携する秋田の創造をめざす開発事業の根幹をなすものであります。本教育委員会ではこれら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、一般国道7号象潟仁賀保道路の建設に先立って、平成21年度に、にかほ市において実施した上谷地Ⅱ遺跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査により、平安時代の掘立柱建物跡や溝跡などが検出され、平安時代に集落が営まれていたことがわかりました。

本書がふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査及び本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所、にかほ市教育委員会など関係各位に対し、厚くお礼申し上げます。

平成22年7月

秋田県教育委員会

教育長 根 岸 均

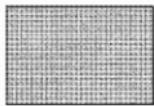
例　　言

- 1 本書は、一般国道7号象潟仁賀保道路建設事業に伴い、平成21(2009)年度に発掘調査したにかほ市上谷地II遺跡の発掘調査報告書である。調査内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報などによって公表されているが、本報告書を正式なものとする。
- 2 本書に使用した地図は、国土地理院発行の1/50,000『象潟』及び国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所提供の1/1,000工事用図面である。
- 3 遺跡基本層位と基本土層中の土色の表記は、農林水産省水産技術會議事務局監修、財團法人日本色彩研究所色票監修『新版標準土色帳』2003年版によった。
- 4 本書に使用した空中写真は、株式会社シン技術コンサルに撮影を委託したものである。
- 5 自然科学的分析は、樹種同定をパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 6 本書の執筆は第2章を相馬美紗子が、他を袴田道郎が執筆し、編集はレイアウトを相馬が行い袴田がまとめた。

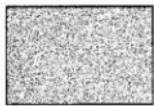
凡　　例

- 1 遺構番号は、その種類ごとに下記の略番号、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

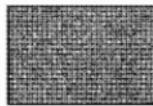
S A · · · 杖列	S B · · · 挖立柱建物跡	S D · · · 溝跡
S K · · · 土坑	S K P · · · 柱穴様ピット	
- 2 遺跡基本層位にはローマ数字を、遺構内層位には算用数字を使用した。
- 3 掘図中の遺物番号は、各遺構ごとに土器・土製品・木製品・金属製品を問わず通し番号を付した。
- 4 古代の土器のうち、須恵器と中世陶器は断面を黒く塗りつぶし土器と区別した。
- 5 出土遺物観察表に記されている环形土器の「底径指数」は口径分の底径の数値を表し、「高径指数」は口径分の器高×100の数値を表す。
- 6 掘図に使用したスクリーントーンは、下記の通りである。



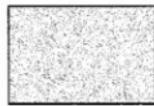
黒色処理



煤・炭化



ガラス質化



漆

目 次

序

例言・凡例

目次

挿図・表・図版目次

第1章 はじめに	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査要項	1
第2章 遺跡の環境	2
第1節 遺跡の位置と立地	2
第2節 歴史的環境	3
第3章 発掘調査の概要	7
第1節 遺跡の概観	7
第2節 調査の方法	7
第3節 調査の経過	7
第4節 整理作業の方法と経過	8
第4章 調査の記録	9
第1節 基本層序	9
第2節 検出遺構と出土遺物	13
(1) 掘立柱建物跡	13
(2) 溝跡	15
(3) 杭列	28
(4) 土坑	32
(5) 柱穴様ピット	35
(6) 遺構外出土遺物	37
第5章 自然科学的分析	52
第6章 まとめ	54
図版	
報告書抄録	

挿 図 目 次

第1図	遺跡位置図	2	第21図	S A44杭列	28
第2図	地形区分図	5	第22図	S A44杭列出土遺物図(1)	29
第3図	鳥海山周辺地域の切峰面図	5	第23図	S A44杭列出土遺物図(2)	30
第4図	上谷地II遺跡と周辺遺跡位置図	6	第24図	S A44杭列出土遺物図(3)	31
第5図	調査区基本土層図・基本土層作成 地点	10	第25図	S K14土坑出土遺物図	33
第6図	地形図	11	第26図	S K12・13・14・16・19・28・37・ 43土坑	34
第7図	グリッド・遺構配置図	12	第27図	S K P04・06・07・09・22・24・25 ・26・27柱穴様ピット	35
第8図	S B20掘立柱建物跡	14	第28図	S K P29・31・32・33・34・35・36 ・42柱穴様ピット	36
第9図	S D11溝跡	16	第29図	遺構外出土遺物(1)	39
第10図	S D11溝跡遺物出土位置図・出土 遺物図(1)	17	第30図	遺構外出土遺物(2)	40
第11図	S D11溝跡出土遺物図(2)	18	第31図	遺構外出土遺物(3)	41
第12図	S D11溝跡出土遺物図(3)	19	第32図	遺構外出土遺物(4)	42
第13図	S D11溝跡出土遺物図(4)	20	第33図	遺構外出土遺物(5)	43
第14図	S D11溝跡出土遺物図(5)	21	第34図	遺構外出土遺物(6)	44
第15図	S D11溝跡出土遺物図(6)	22	第35図	遺構外出土遺物(7)	45
第16図	S D11溝跡出土遺物図(7)	23	第36図	遺構外出土遺物(8)	46
第17図	S D11溝跡出土遺物図(8)	24	第37図	遺構外出土遺物(9)	47
第18図	S D17溝跡出土遺物図(1)	25	第38図	遺構外出土遺物(10)	48
第19図	S D17溝跡出土遺物図(2)	26	第39図	自然科学的分析写真	53
第20図	S D17溝跡	27			

表 目 次

第1表	上谷地II遺跡周辺の遺跡一覧	4	第4表	出土遺物観察表	49
第2表	S B20柱穴計測一覧表	13	第5表	樹種同定結果	52
第3表	柱穴様ピット計測一覧表	36			

図 版 目 次

図版1	上谷地II遺跡全景	
図版2	基本土層 S B20完掘	
図版3	S D11完掘 S D11遺物出土状況 S D11内杭列・柵 S D17遺物出土状況 S A44杭材出土状況	
図版4	S D17完掘 S A44半裁	
図版5	S K12半裁状況 S K13完掘 S K14完掘 S K16半裁断面 S K19半裁断面 S K28半裁状況 S K37完掘 S K43完掘	
図版6	S D11出土遺物(1)	
図版7	S D11出土遺物(2)	
図版8	S D11出土遺物(3)	
図版9	S D11・遺構外出土遺物	
図版10	S D17出土遺物	
図版11	S D17・SK14・遺構外出土遺物(1)	
図版12	遺構外出土遺物(2)	
図版13	遺構外出土遺物(3)	
図版14	遺構外出土遺物(4)	

第1章 はじめに

第1節 調査に至る経過

一般国道7号象潟仁賀保道路は、日本海沿岸東北自動車道の建設に伴う国道建設事業である。日本海沿岸東北自動車道は、新潟市から青森市へと至る日本海沿岸の高速交通体系を改善し、沿線諸地域の生産活動や情報・物資の交通を促進すべく計画された、総延長320kmの高速道路である。

秋田県内では、象潟仁賀保道路及び仁賀保本荘道路、秋田外環状道路、琴丘能代道路、大館西道路を連結し、小坂ジャンクション（J.C.T）で東北自動車道に接続する。平成9年に日本海沿岸東北自動車道として路線指定され、このうち秋田南インターチェンジ（I.C）～昭和・男鹿半島I.C間は同年に開通。平成13年には河辺I.C～秋田空港I.C間が開通し、平成14年には、琴丘・森岳I.C～能代南I.C間、昭和・男鹿半島I.C～琴丘・森岳I.C間、岩城I.C～秋田空港I.C間、平成18年には能代南I.C～能代東I.C間、平成19年には能代東I.C～二ッ井白神I.C間、平成20年には岩城I.C～仁賀保I.C間がそれぞれ開通している。

上谷地II遺跡が所在する仁賀保I.C～象潟I.C間については、平成17年1月に都市計画決定された。これを受けて秋田県教育委員会は、平成19～20年に仁賀保I.C～金浦I.C間の遺跡分布調査を行い、その結果、上谷地II遺跡が確認調査の対象となった。確認調査は路線内の8,850m²を対象に平成20年10月27日から11月7日にかけて上谷地I遺跡と合わせて実施され、その結果、古代の集落跡であることが判明し工事区域内の2,950m²について発掘調査が必要であることがわかった。発掘調査は平成21年7月から9月にかけて2,950m²を対象に行った。

第2節 調査要項

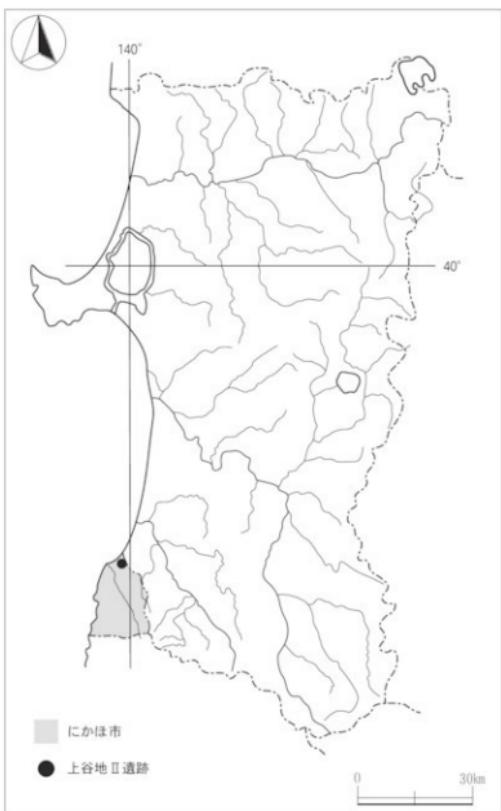
遺 跡 名	上谷地II遺跡(かみやちにいせき)
遺 跡 略 号	6K YT II
遺 跡 所 在 地	秋田県にかほ市平沢字上谷地103外
調 査 期 間	平成21年7月13日～9月9日
調 査 面 積	2,950m ²
調 査 主 体 者	秋田県教育委員会
調 査 担 当 者	袴田 道郎（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 学芸主事） 相馬美紗子（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 調査・研究員）
總務担当者	時田 慎一（秋田県埋蔵文化財センター中央調査班 主任専門員）
調査協力機関	国土交通省東北地方整備局秋田河川国道事務所 にかほ市教育委員会

第2章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と立地

上谷地Ⅱ遺跡の所在するにかほ市は、秋田県南西部に位置し、平成17(2005)年3月に仁賀保町・金浦町・象潟町の3町が合併して誕生した。北側と東側は由利本荘市、南側は山形県と接し、西側は日本海に面している。県内では積雪量の少ない最も温暖な地域である。

遺跡は、旧仁賀保町、にかほ市平沢字上谷地103外に所在する。JR羽越本線仁賀保駅より南約1km、日本海の汀線から約1.5kmの標高13.1～13.4mの台地上に位置する。経緯度は、東経139度58分、北緯39度16分である。遺跡周辺の現況は水田で、遺跡は休耕田であった。



第1図 遺跡位置図

遺跡を中心とする周辺地形は鳥海山の形成と崩壊によって生み出された地形であり、鳥海山との関わりを切り離して考えることはできない。「出羽富士」とも呼ばれる鳥海山は標高2,230mの東北第2の高峰で、約50万年前に活動を開始してから今なお噴火の恐れのある成層火山である。第3図にあるように、鳥海山を中心に同心円状に高度分布が広がり、高度は西方～北西方向に規則的に低下している。また、鳥海山の山麓部には「山体崩壊」や「岩屑なだれ」で形成された標高18～20mの小高い丘が隨所に見られ、火山地形を呈している。

遺跡は地形区分では象潟泥流台地上の北端にあり、東側500mほどには非火山性丘陵の仁賀保丘陵地が南北に延びている。象潟泥流台地は約2,600年前とも約3,000年前とも言われる東鳥海馬蹄形カルデラの形成に伴って発生した象潟泥流によって形成されたとされる。

第2節 歴史的環境

現在のにかほ市のある地域は古代から中世、近世にわたって史料にたびたび登場すると共に、古の面影の垣間見られる遺跡や文化財が隨所に存在する地域である。地理的な環境と同じく烏海山が歴史に与えた影響も大きい。ここでは、本地域の遺跡を中心に歴史的な環境を概観する。

この地域の縄文時代の遺跡は、紀元前466年の烏海山の山崩れに伴う岩屑なだれに覆われてしまった可能性があり、確認されている遺跡が少ない。縄文時代中期の土器片が出土している前川谷地中遺跡(23)と鹿島台遺跡(24)は大森山が盾となって岩屑なだれを免れたためその存在が確認できた例である。第4図にある縄文時代の遺跡は岱山遺跡(25～27)、黒渕遺跡(12)、晩期の土器が出土している高田遺跡(13)、縄文時代のTピットと平安時代の竪穴住居跡が検出された複合遺跡の下岩の沢遺跡(19)などである。この地域では旧石器時代や弥生時代の遺跡は確認されていない。

古代の遺跡は先述の下岩の沢遺跡の他、立沢遺跡(6)、前田表遺跡(3)、前田表Ⅱ遺跡(2)などがある。下岩の沢遺跡からは鉄滓、鍛冶滓など製鉄に関連する遺物が検出されている他、土師器・須恵器などが出土しており、9世紀末から10世紀前半に營まれた集落跡と考えられている。立沢遺跡からは掘立柱建物跡、製塙遺構が検出され、墨書き土器、円面鏡が出土しており役所と関係を持つ遺跡であると考えられている。立沢遺跡の北側に位置し、墨書き土器の出土している前田表Ⅱ遺跡や隣接する前田表遺跡など周辺遺跡との関連の研究が待たれる。古代において烏海山は大物忌神として畏敬の対象であった。大物忌神の初見は『統日本後紀』承和5(838)年である。この年の5月に従五位上から正五位下に位階を与えられたことを皮切りに徐々にその位階は上がり、元慶4(880)年には従二位が与えられている。『三代実録』の記録では貞觀13(871)年4月に噴火し、その悲惨な情景が記されている。このような噴火に対する人々の恐れとともに、この時期に起こった元慶の乱や天慶の乱にみられる蝦夷との関係による不安が、大物忌神に対する畏敬の念と救いを求める願いとして人々の間にあつたものと思われる。「烏海山」の名が歴史上に登場するのは室町時代に入ってからである。

この地域では山根館(16)・安倍館(4)・鴻ノ巣館(10)・平沢館(9)・美濃輪館(14)・待居館(17)・黒川館(15)・丸山館(18)・赤石館(20)・中山館(21)・栗山館(22)・天狗平館(28)など中世城館が数多く確認されている。県指定史跡である山根館は仁賀保氏が135年間居城したことがわかっている山城で、仁賀保氏が関ヶ原での戦功により常陸武田に転封となったことにともない1602(慶長7)年に廃城となっている。帯郭、空堀、空堀に沿った古道、また大手道などが確認されている他、礎石約200個が検出され、それにより1間6尺6寸の寸法で、四棟ほどの建物があったとされている。由利地方の城館の特色として誰が居城していたかが明確であり、石を防御施設に利用していることなどがあげられる。中世の由利諸氏の動きについて概観すると、鎌倉初期の奥羽合戦後、由利郡では他地域のように関東武士団が地頭に任命されたりはせず、平安時代以来の在地領主であった由利氏がそのまま安堵された。しかし由利氏も北条氏に地頭職を奪われ大戸局の支配下となる。室町時代になると大井(矢島)氏・仁賀保氏・赤宇津(赤尾津)氏・岩屋(岩谷)氏・下村氏・玉米氏・打越(内越)氏・滝沢氏・羽川氏などの俗に言う由利十二頭がそれぞれ領地を支配したが、戦国時代に入ると安藤氏や最上氏・小野寺氏などの戦国大名の影響を受け相争うようになる。しかしこの由利諸氏の抗争も1590年には終焉を迎え、豊臣秀吉が仁賀保氏・赤尾津氏・滝沢氏・内越氏・岩谷氏を由利五人衆に定めた。

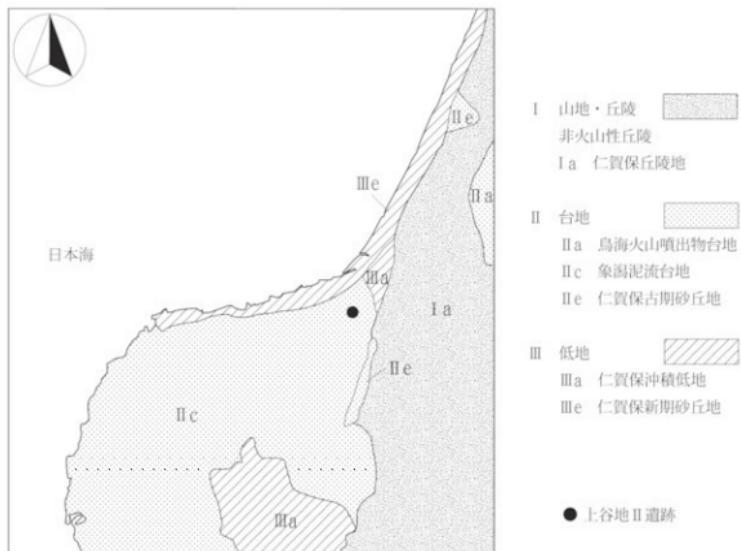
1602年の仁賀保氏の転封後、由利5万5千石は最上義光領となり、仁賀保では新田開発が進められた。しかしその最上氏も1622(元和8)年に改易になり一年足らず本多正純領となるが、これも翌年改易となり、1623(元和9)年に六郷氏、岩城氏、仁賀保氏、打越氏が入ることとなった。旧領仁賀保領には大坂にいた仁賀保拳誠が、平沢以南、庄内藩境に至る1万石を賜り戻ってきた。しかし翌年に拳誠が亡くなり、1626(寛永3)年にその遺言に従い長男良俊が7千石を、次男誠政が2千石、三男誠次が千石を相続し、長男良俊が象潟の塙越に本拠地を置き仁賀保藩主となったが、1631(寛永8)年に嗣子なく亡くなつたため仁賀保7千石が断絶し、一時庄内藩酒井氏の預かりとなる。残った仁賀保地域を平沢に陣屋(8)をおいた仁賀保氏が治め幕末に至っている。結局旧領の仁賀保領1万石は仁賀保氏領、生駒藩領、本荘領に分割されたため、仁賀保地域には1つの村を複数の領主が分割して治める「相給村」が3村もでき、仁賀保地域の領主の移り変わりの複雑さを物語っている。

引用・参考文献

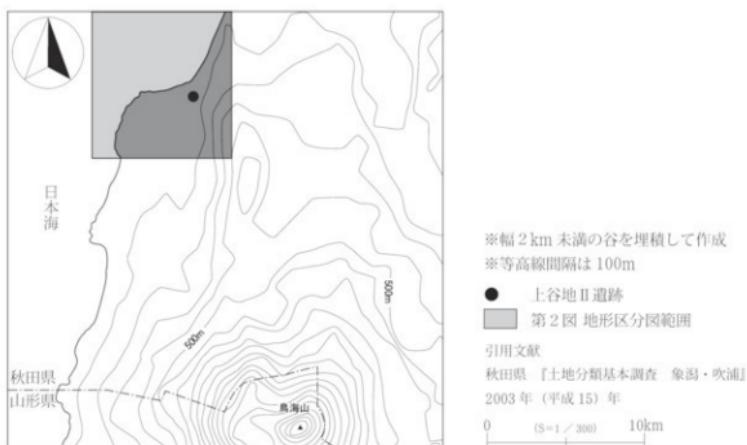
- 秋田県教育委員会『秋田県文化財調査報告書第86集 秋田県の中世城館』 1981(昭和56)年
 仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』 1986(昭和61)年
 仁賀保町教育委員会『立沢遺跡発掘調査報告』 1987(昭和62)年
 須藤儀門『鳥海考』 1988(昭和63)年
 秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図(山利地区版)』 2001(平成13)年
 塩谷順耳・富澤泰時・熊田亮介・渡辺英夫・古内龍夫『秋田県の歴史』 2001(平成13)年
 伊藤清郎・山口博之編『中世出羽の領主と城館 奥羽史研究叢書2』 2002(平成14)年
 秋田県『土地分類基本調査 象潟・吹浦』 2003(平成15)年
 仁賀保町教育委員会『仁賀保町史 普及版』 2005(平成17)年

第1表 上谷地Ⅱ遺跡周辺の遺跡一覧

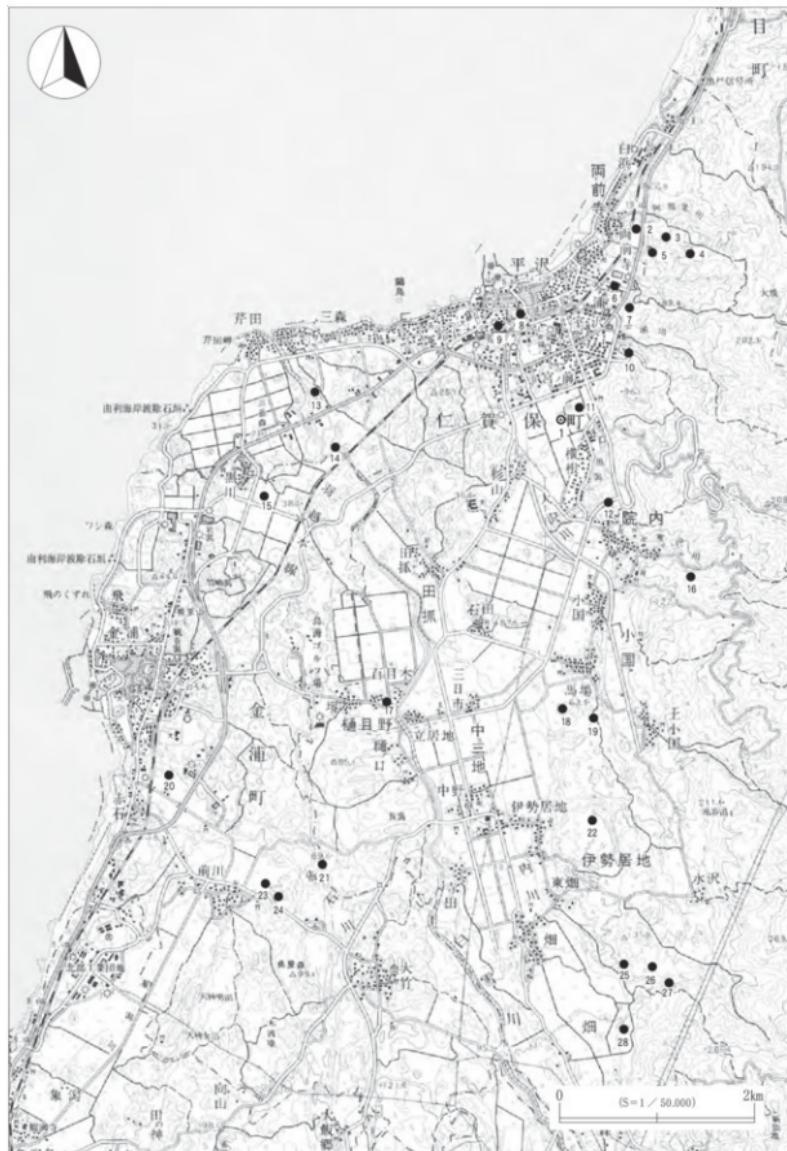
番号	遺跡地図番号	遺跡名	種別	遺構・遺物	備考
1		上谷地Ⅱ		土師器片・須恵器片	
2		前田表Ⅱ		土坑・溝跡・土師器・須恵器・須恵系陶器片・土製品など	
3	35-36	前田表	遺物包含地	土師器片・須恵器片	
4	35-30	安倍館	館跡	空堀	町指定史跡
5	35-15	阿部堂	遺物包含地	古鉢(開元通宝・宗元通宝)など約360枚	
6	35-34	立沢	集落跡	掘立柱建物跡・土師器・須恵器・木製品など	
7		横杖	集落跡		
8	35-13	仁賀保家陣屋	陣屋跡	堀跡	
9	35-53	平沢館	館跡		
10	35-39	鴻ノ巣館	館跡	空堀	
11		上谷地Ⅰ		土師器片・須恵器片	
12	35-47	黒潟	遺物包含地	繩文土器片・土師器片・須恵器片	
13	35-52	高田	遺物包含地	繩文土器片(晚期)	
14	35-37	美濃輪館	館跡	土塁	
15	36-5	黒川館	館跡		
16	35-②	山根館	館跡		県指定史跡
17	35-32	待居館	館跡		町指定史跡
18	35-38	丸山館	館跡		
19	35-35	下岩の沢	集落跡	竪穴住居跡、繩文土器片・土師器片・須恵器片・鉄津	町指定史跡
20	36-14	赤石館	館跡		
21	35-54	中山館	館跡		
22	35-31	栗山館	館跡	空堀	
23	36-19	前川谷地中	遺物包含地	繩文土器片(中期)	
24	36-18	鹿島台	遺物包含地	繩文土器片(中期)	
25	35-44	岱山Ⅱ	遺物包含地	繩文土器片	
26	35-43	岱山Ⅰ	遺物包含地	石礫・石甃	町指定史跡
27	35-45	岱山Ⅲ	遺物包含地	繩文土器片	
28	35-28	天狗平館	館跡		



第2図 地形区分図



第3図 鳥海山周辺地域の切峰面図



第4図 上谷地Ⅱ遺跡と周辺遺跡位置図

第3章 発掘調査の概要

第1節 遺跡の概観

上谷地Ⅱ遺跡は、鳥海山の噴火により形成された象潟泥流台地の北端部、東側には鴻ノ巣館跡がある仁賀保丘陵地が迫る低湿地に立地する。調査区は標高約13mの田園地帯の中にある。周囲には小高い泥流丘が散見され調査区東南部は丘と隣接する。また、調査区の中央を南北方向に農道が横切っており、農道の西側では東西方向に、東側では南北方向に溝跡が検出された。遺物の多くは古代のものだが、縄文や中世、近世のものもあり、断続的に利用されていたことが考えられる。象潟泥流台地上の平坦面は調査範囲をこえて南西に延びていることから、遺跡はより南西に広がると考えられる。

第2節 調査の方法

表土除去はバックホーにより行い、以後は移植ゴテやスコップ等を利用し人力で掘削を進めた。排土置き場は調査区北に隣接する平坦部を利用した。

作図用のグリッド配置は、調査区内の工事用中心杭No.590を原点MA50（X = -79549.944、Y = -74679.213）として、この杭から国家座標第X系座標北を求める、このラインを南北基線、これに直交するラインを東西基線とした。この東西・南北基線に平行する4mごとのラインを必要数設定し、これらの交点に杭を打設して4m×4mのグリッドとした。グリッドの表記は、東西方向を表す2組のアルファベットと南北を表す数字で示している。2組のアルファベットの左を母単位、右を子単位として、20子単位で1母単位という表記法である。例えば母単位Mの範囲はMA～MTまでの子単位で西に移動し、MTの次は母単位Nの範囲となるためNAとなる。数字は北へ行くほど増え、南に行くほど減る表記法である。グリッドの呼称は、各グリッドの南東隅に打設された杭の記号を用いている。

調査の記録は、平面図・断面図及び写真で記録化した。平面図・断面図は1／20を原則としたが、遺構細部の図面を必要とする際には1／10で作図した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーサルフィルム及びデジタルカメラで行った。

遺物は、遺構内出土のものは出土遺構名・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入し、遺構外出土のものは、出土グリッド・出土層位・遺物番号・出土年月日を記入した袋に入れ、取り上げた。

遺構の確認はIV層上面を中心に行った。遺構番号は、確認毎に1から通し番号を付した。

第3節 調査の経過

平成21年7月13日から9月9日まで実施した発掘調査の経過は次のとおりである。本調査に先立ち6月23日より表土除去を、6月30日よりグリッド杭打設を開始した。

【第1週】7月13日～7月17日

作業員に作業内容の説明や諸注意を行い、発掘器材の搬入、環境整備を行った。調査前風景写真を

第3章 発掘調査の概要

撮影。調査区全域が水没していたため排水作業から開始した。農道の切り回しが必要か判断するため、比較的水が漬かない東区の農道脇より掘り下げを開始。土師器、須恵器の他に刀子や鉄滓が出土。

【第2週】7月21日～7月24日

農道脇の土層を精査の結果、基本層位を確認した。雨天が続き排水作業を行う中、遺構検出作業を開始。東区に溝跡を検出。溝跡を中心に木製品が多く出土。

【第3週】7月27日～7月31日

遺構検出作業を継続。西区にも溝跡を検出。農道脇の精査の結果、農道の切り回しは行わない事とした。

【第4週】8月3日～8月7日

遺構検出、調査を進めた。西側溝跡から木製品を検出。新たに土坑を確認、調査。

【第5週】8月10日～8月15日

盆休み

【第6週】8月17日～8月21日

東側溝跡を掘り下げたところ遺物が多数出土。調査を行った。

【第7週】8月24日～8月28日

西側溝跡の調査を中心に進めた。溝跡に伴う柵列や柱穴を確認。

【第8週】8月31日～9月4日

空中写真撮影を3日に行った。そのため全体を精査し直し、遺構検出に努めた。地形図作成を開始。

【第9週】9月7日～9月9日

東区溝跡脇に掘立柱建物跡を検出、調査。7日に現場引き渡しを行い、撤収作業、危険箇所の埋め戻しを行った。

第4節 整理作業の方法と経過

各遺構は、現場で作成した図を第一原図とし、これを基に平面図と断面図を組み合わせ、適宜縮尺を変更し第二原図を作成した。第二原図の作成は平成21年9月～10月にかけて行い、トレースは平成21年10月～12月にかけて行った。

遺物の整理は、平成21年9月から～平成22年5月にかけて、秋田県埋蔵文化財センター中央調査班において行った。洗浄・注記・接合・復元作業・実測・写真撮影を行った。ある程度復元された土器は実測図を作成し、必要に応じて拓本を探った。実測図は基本的に1／1で作成した。

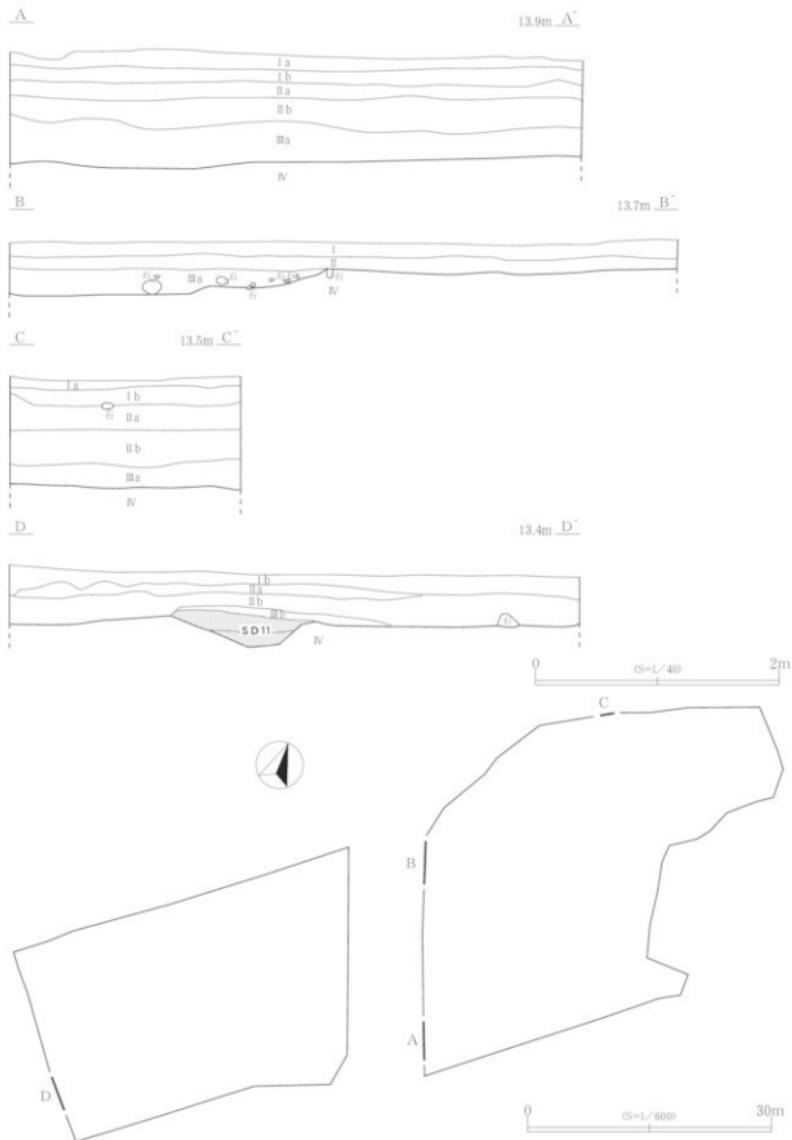
第4章 調査の記録

第1節 基本層序

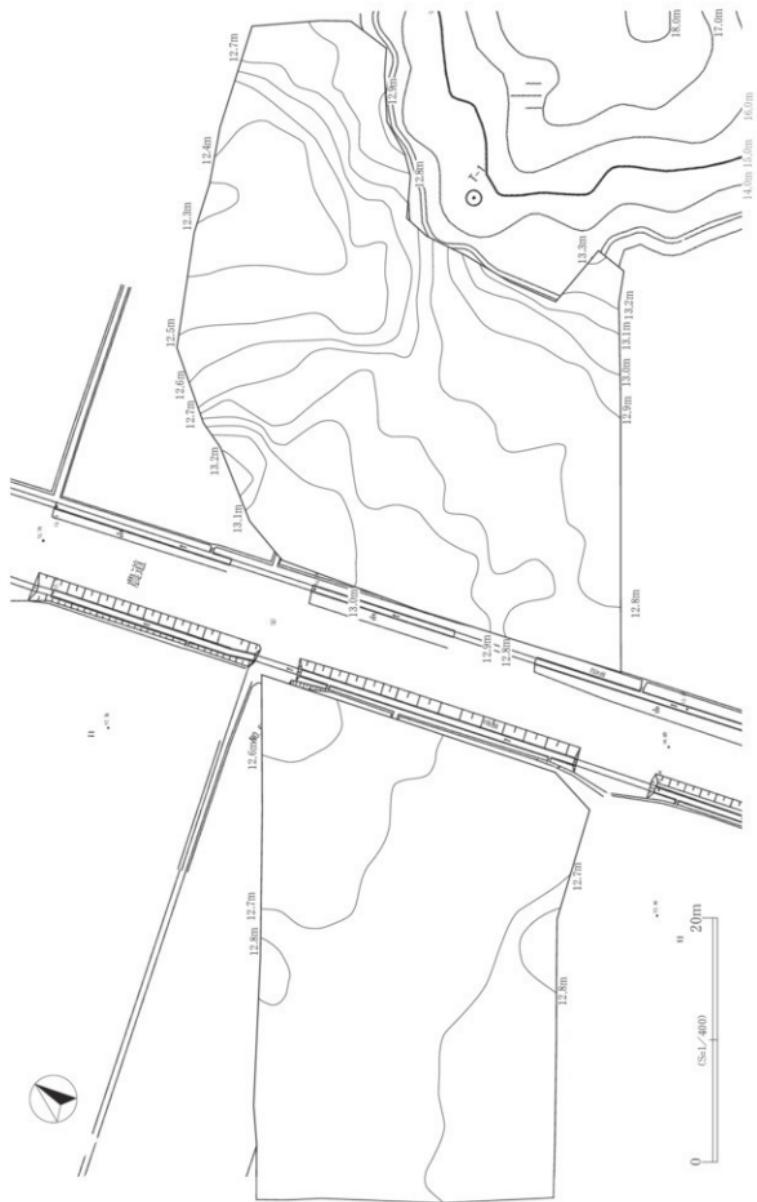
遺跡の地形は、現在は水田に利用されていたため平坦であるが、旧地形には若干の起伏がある。遺跡の周辺には鳥海山の山体崩壊による岩屑なだれで形成された丘が点在しており、調査区とも北東面で接している。また、基本土層Bの面で削平の痕が確認できるのだが、現在は失われている丘が調査区の北西部にもかつてはあったことが地形図(第6図)からも推測できる。地域の人の話によると調査区の北西の中央部には小高い林があったようである。地形図をみると東側の丘から緩やかに北西方向へ下っており、調査区内では最も深い基本土層Cの地点から、西方向にまた上がっていく様子が見てとれる。また、南西側にも地形が上がっていく様子が若干窺え、調査区外にも丘もしくは高台があつたと思われる。調査区から東へ100mほどに遺物含有地である上谷地I遺跡、西に300mほどにも遺物含有地である新脇田遺跡があり平成20年度に試掘が行われたところ、所々に本調査区のような高台部分も散見できたが、基本的には3mを超す泥炭層が広がっており、水田となる以前は湿田や沼地であった。本調査区は丘と丘に挟まれた高台部分であったと推察される。そのため近代の水田造成時に大きく削平されており、場所によっては地表面から20cmほどで地山面が現れる。水田として利用されていたためか、その地山面も大きく搅乱されていた。古代の堆積土は残っておらず、遺構内含土と同様の土は調査区内には見つかなかった。また、全層位にわたり鳥海山噴火・崩壊起源の、大きいものは1mを超す大小礫群が混入しており、地山面直上のⅢb層では人力による掘削作業が困難な箇所も見られた。基本土層における地山面より上位の層はすべて耕作・造成土であると判断した。

基本層序は次のとおりである。

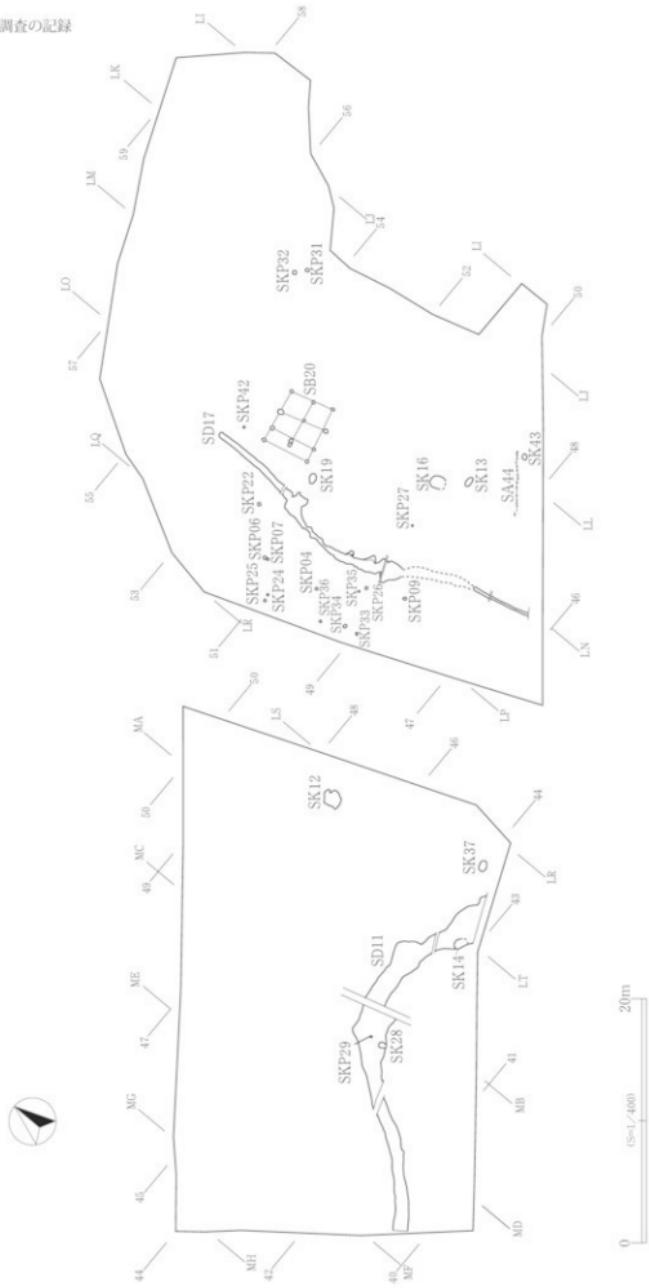
- | | |
|--------|---|
| I a層 | 暗褐色土(10YR 3/3)シルト質。草根が混入する、田の畦作りに盛られた土。 |
| I b層 | 褐色土(10YR 4/4)シルト質。草根が若干混入する表土。 |
| II a層 | 黒褐色土(2.5Y 3/2)シルト質。搅乱を受けたと思われる地山ブロックや炭化物が混入する耕作土。 |
| II b層 | 黒褐色土(10YR 3/2)シルト質。炭化物や径1~7mm程度の白色石粒が全体に混入する耕作土。 |
| III a層 | 黒褐色土(10YR 2/2)粘土質。遺物が混入する田の造成土。 |
| III b層 | 黒褐色土(10YR 2/2)岩盤。IV層直上に数か所で残る大小礫岩が堆積した層。 |
| IV層 | 褐灰色土(10YR 4/1)粘土質。本来青みがかった粘土層だが、酸化しすぐに変色し灰白色~黄味がかった色となる地山土。この土にも大小礫岩が多量に混入する。 |



第5図 調査区基本土層図・基本土層作成地点



第6図 地形図



第7圖 グリッド・遭難記録圖

第2節 検出遺構と出土遺物

本調査で検出された遺構は、平安時代の掘立柱建物跡1棟、溝跡2条、柵列1条、土坑8基、柱穴様ビット17基である。これらの遺構は遺跡を東西、南北に走る2条の溝跡周辺の第IV層上面で検出された。

(1) 掘立柱建物跡

S B 20 (第8図、図版2)

〈位置・確認状況〉 L N 52・53、L M 52・53 グリッドに位置する。IV層で検出した12基の柱穴様ビットから構成される。

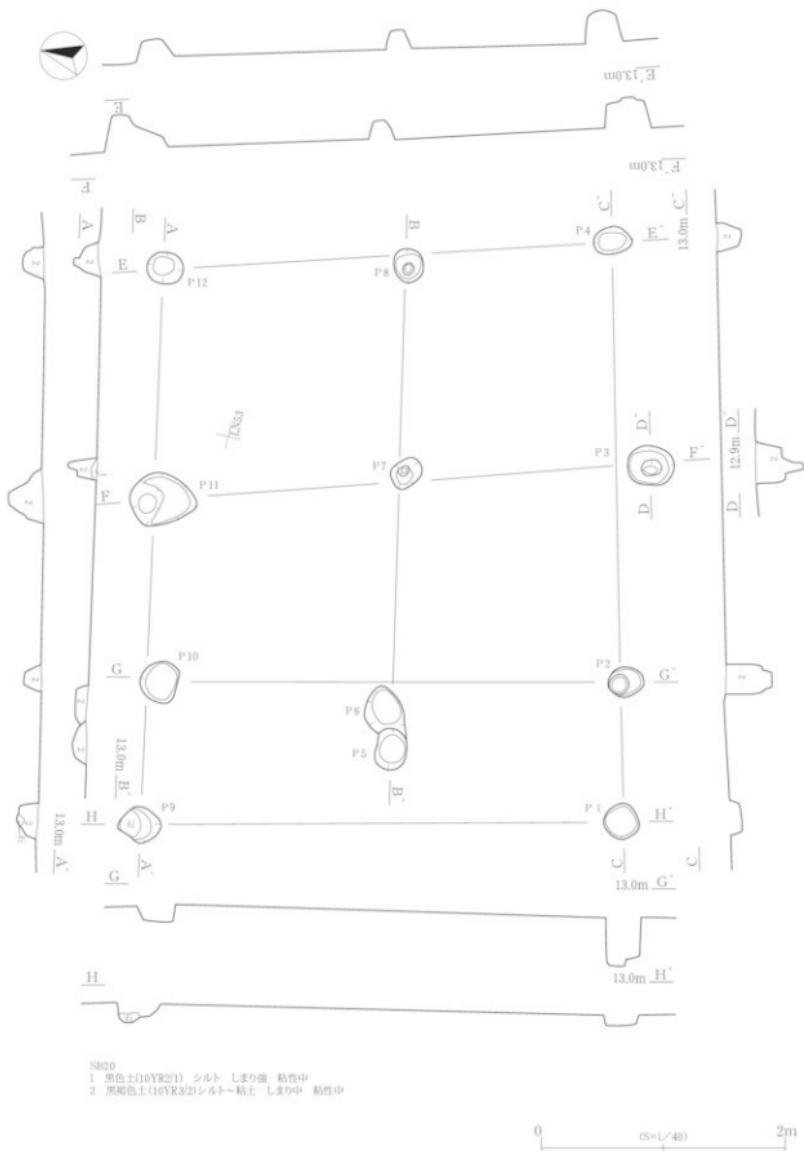
〈重複関係〉 重複はないが、S D 17の東縁辺に沿って建てられている。

〈規模〉 桁行2間、梁行2間の正方形の平面形をしている。北辺・南辺の両西側に柱穴（P 1・P 9）があり、他の柱穴と比べ浅く、中間に柱穴がなく、P 1-P 2間とP 9-P 10間の柱間距離が他より短いため、西へ1.2mほど張り出した庇であると考えられる。P 5とP 6は切り合っており、P 5の方が新しいためこの1本は建て替えと思われる。桁行総長は南側柱列（P 1～P 4）で4.75m、柱間距離は、西からP 1-P 2間1.16m、P 2-P 3間1.80m、P 3-P 4間1.90m。中央柱列（P 5～P 8）で4.0m、柱間距離は、西からP 5-P 6間0.40m、P 6-P 7間1.94m、P 7-P 8間1.70m。北側柱列（P 9～P 12）で4.56m、柱間距離は、西からP 9-P 10間1.20m、P 10-P 11間1.50m、P 11-P 12間1.94mである。梁行総長は東側柱列（P 12～P 4）で3.70m、北からP 12-P 8間2.00m、P 8-P 4間1.70m。中央東側柱列（P 11～P 3）で4.1m、柱間距離は北からP 11-P 7間2.1m、P 7-P 3間2.0m。中央西側柱列（P 9～P 1）は4.0mである。柱掘形は径0.16～0.56mのほぼ円形から梢円形を呈し、検出面からの深さは、約0.09～0.40mである。堆積土は黒褐色土の単層であり、柱痕は認められなかった。主軸方位は北側柱列でN-80°-Eである。

〈出土遺物〉 P 2から土師器壺破片1点（3.5g）が出土した。

第2表 S B 20 柱穴計測一覧表

柱穴 番号	S B 20			底面標高 (m)
	長軸	短軸	深さ	
P1	0.30	0.30	0.09	12.64
P2	0.30	0.25	0.40	12.37
P3	0.38	0.33	0.39	12.37
P4	0.31	0.23	0.26	12.50
P5	0.33	0.25	0.12	12.62
P6	0.40	0.32	0.09	12.64
P7	0.27	0.20	0.25	12.52
P8	0.27	0.25	0.20	12.52
P9	0.30	0.16	0.16	12.68
P10	0.35	0.30	0.14	12.70
P11	0.56	0.45	0.30	12.48
P12	0.31	0.26	0.18	12.52



第8図 S B 20 堀立柱建物跡

(2) 溝跡

SD11(第9~17図、図版3・6~9)

〈位置・確認状況〉 MD・ME40、MC・MD41、MC・MD42、LS・LT・MA・MB・MC43、MA・MB44グリッドに位置し西側調査区を横断する。第IV層上面で砂質の黒褐色土の筋として確認した。西から南東にカーブし、両端共に調査区外へ延びている。

〈重複関係〉 SK14を切っている。SK28・SKP29はSDを切っているが、切り合いでなく伴うものであることが考えられる。

また、中央部(MB43)には木柵状の構造物が残っていた。

〈堆積土〉 上面は多くの所で擾乱を受けていたが、およそ3層に分けられた。西端では、上面に岩盤層が残っていたが、黒褐色の砂質土が主である。2層には縞状の堆積が見られることから水性の自然堆積と考えられる。

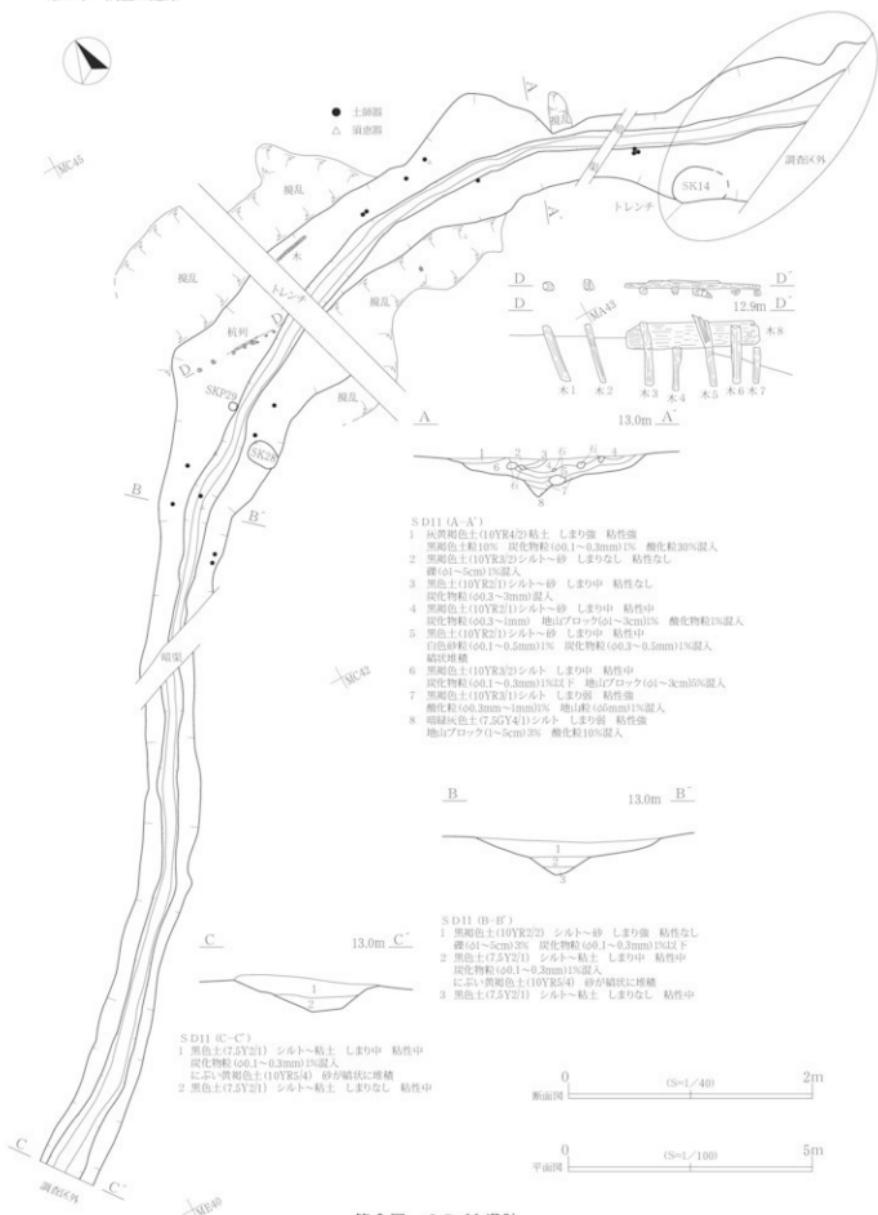
〈平面形・規模〉 確認された総延長は29.48m、幅0.84~4.10m、掘り込みの深さは0.27~0.30m程である。両端が調査範囲外になるので、本来の長さは不明である。上面は削平されたり、擾乱を大きく受けたり本来の姿は不明だが、断面は周囲から緩やかに下り中央部で20cm幅の溝状に一段深く掘り下げられている。

〈出土遺物〉 土師器の壺や甕破片577点(4,154.0g)、須恵器破片44点(1,466.3g)、支脚など土製品3点(148.9g)、柵の板材1枚や杭7本、曲物底部の板材や蓋の破片55枚、板材破片29枚、箸や加工痕のある棒状木製品破片72点、鉄滓1点(6.2g)が出土した。遺物の多くが、柵が残り若干幅の広がる中央部分とSK14が並ぶ東端部分に集中しており、特に東端側から曲物や墨書き土器、砲弾形の土師器、甕底部などが出土した。

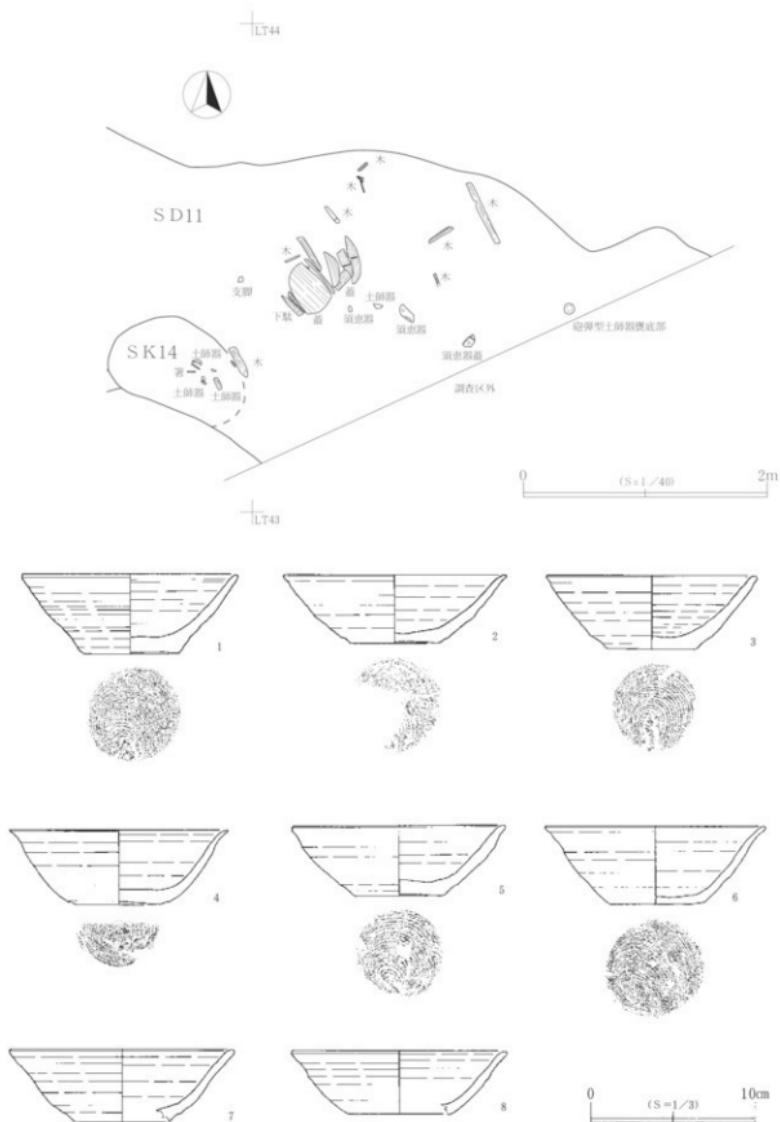
土師器壺・皿は、全てがロクロ成形で、底部切り離しは回転糸切りである。17の底部には「十」の墨書きがある。皿の18には底部から側面にかけて胎土内を貫いて方形断面の穴が開く。19~22は高台付壺で、19は内面をヘラ磨き後黒色処理が成されている。22には底面全体に煤が残り灯明皿に転用された可能性がある。23は鉢の胴部でロクロ目が残る。24は小型の甕底部でロクロ成形である。25は底部に笊葉痕を残し内面を縱方向のハケ目で調整している。26は砲弾形甕の底部で外面に平行タタキ目、内面にはアテ具痕を残す。

須恵器の28・29は回転ヘラ切り痕を残す壺で底部の立ち上がりが丸みを持つ。30はタタキ締め後ロクロ調整をしている壺の頸部で段を有し下に垂れる。27は甕胴部で外面タタキ目の上に卸し目、内面アテ具痕を残す。32は痕跡からおそらくツマミが付いていた蓋で内面には判読不能の墨書きがある。31も蓋で、垂直な周面を持ち内面全体に黒色の釉が掛かる。33・34はいずれも輪積痕が残る無調整の器面をもつ支脚で、全体に被熱している。

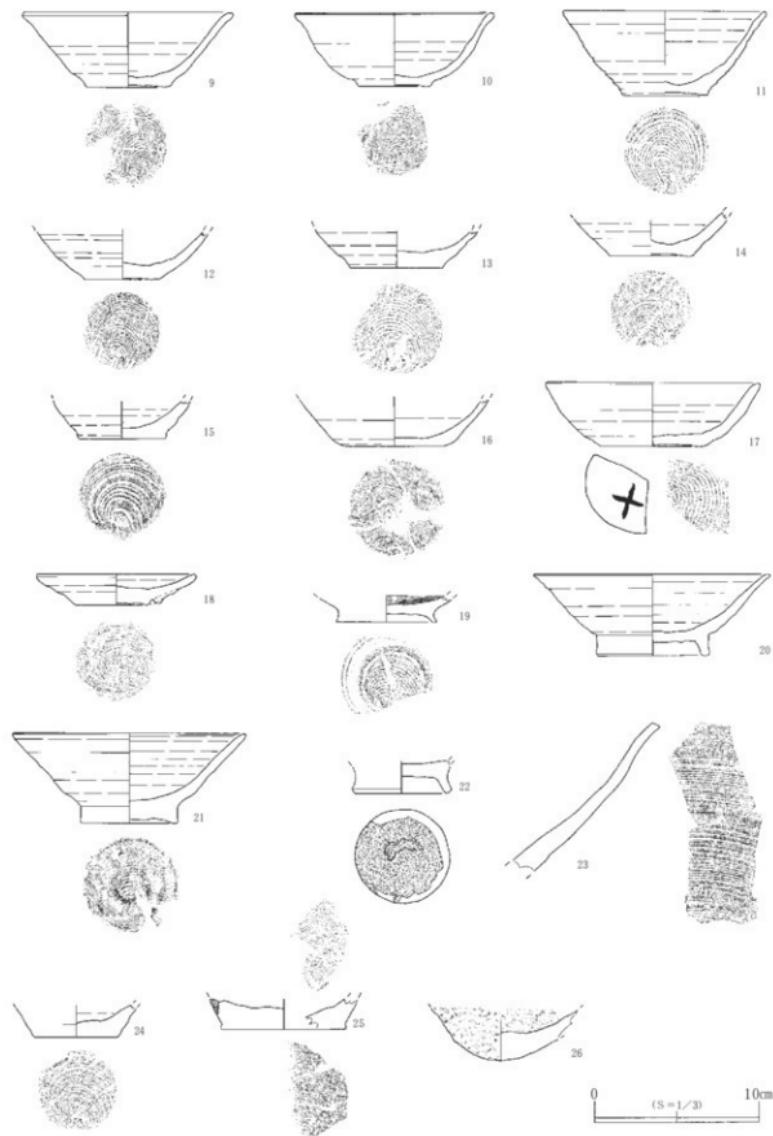
柵状構造物には板材1枚とそれを支える杭材7本(第13~15図)がその形を留めていた。周囲からは同じような板材や杭材の破片が出土しており、当時はこの1組だけではなかったと思われる。東端のSK14と切り合う地点から、杉で作られた曲物の底板や蓋が出土した(第10図)。46は小型の底板。47・48はやや大型の蓋である。44は梢円形の下駄。45は高台付皿の底部。68~74は串。また、50~67は杉で作られた箸で、ほぼ6角形の断面を持つ。



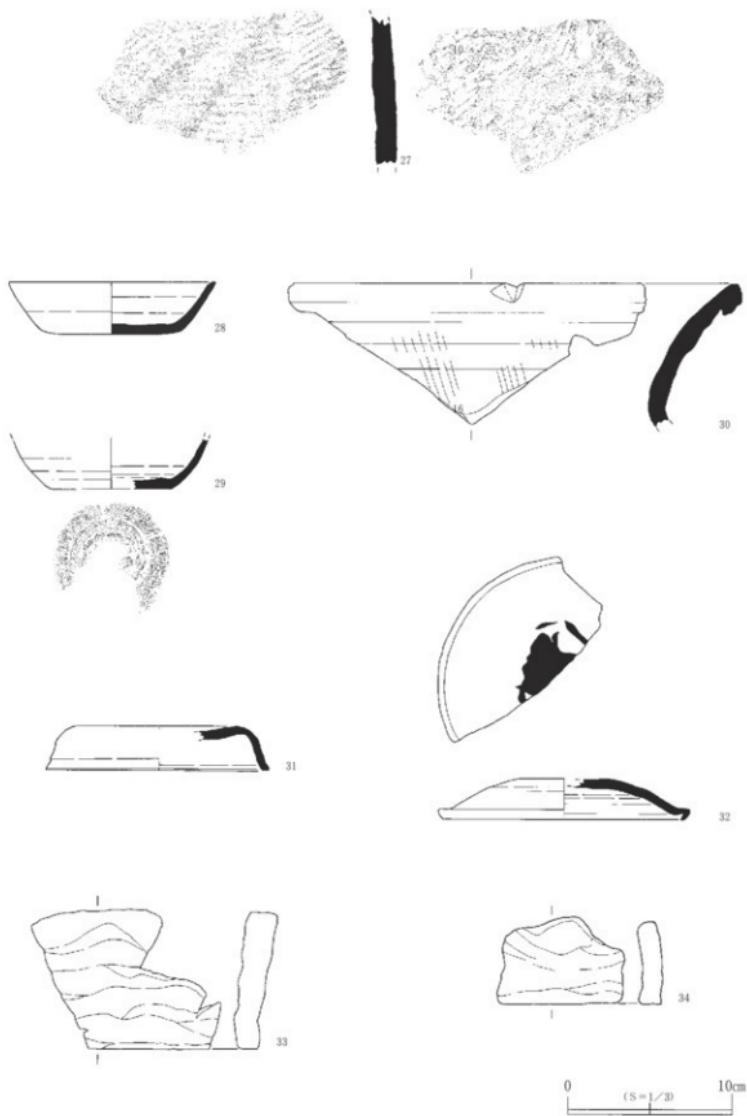
第9図 SD 11溝跡



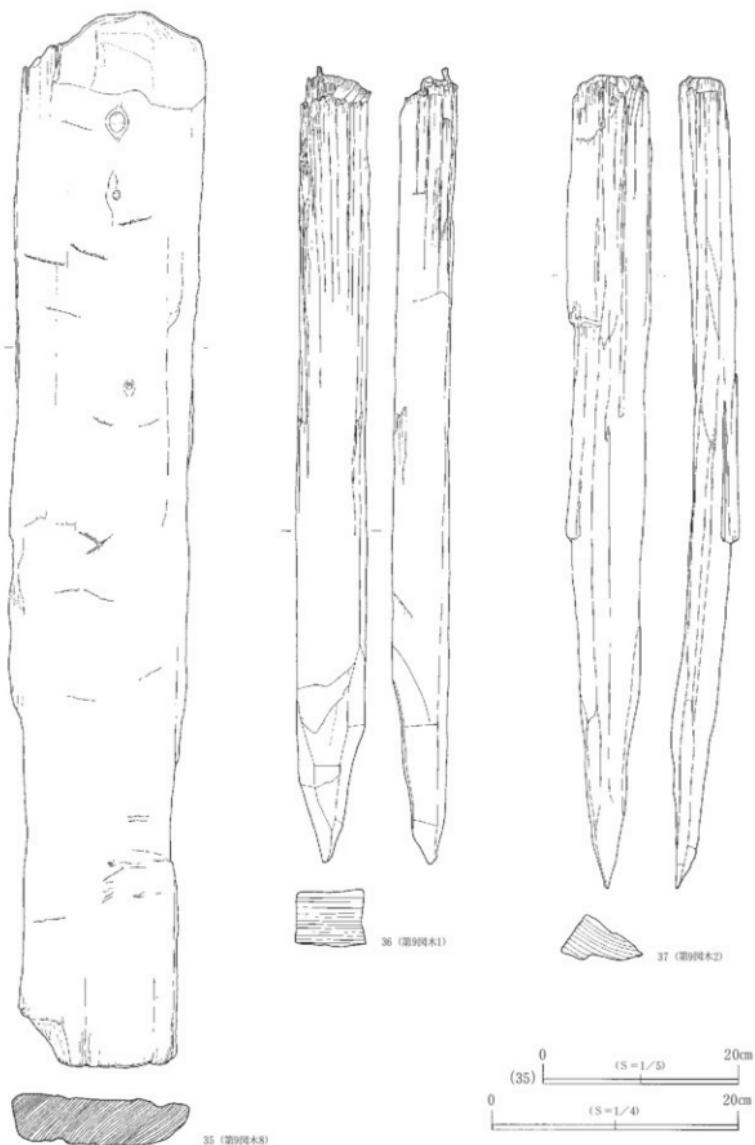
第10図 SD 11溝跡遺物出土位置図・出土遺物図（1）



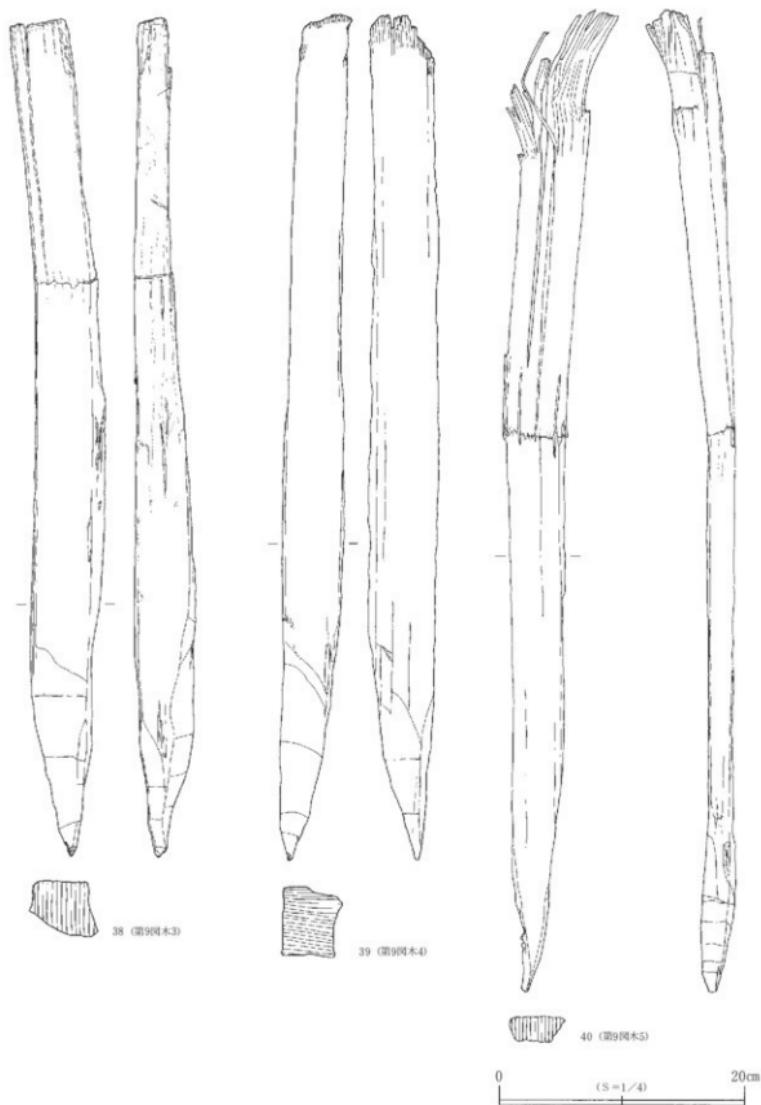
第11図 SD 11溝跡出土遺物図（2）



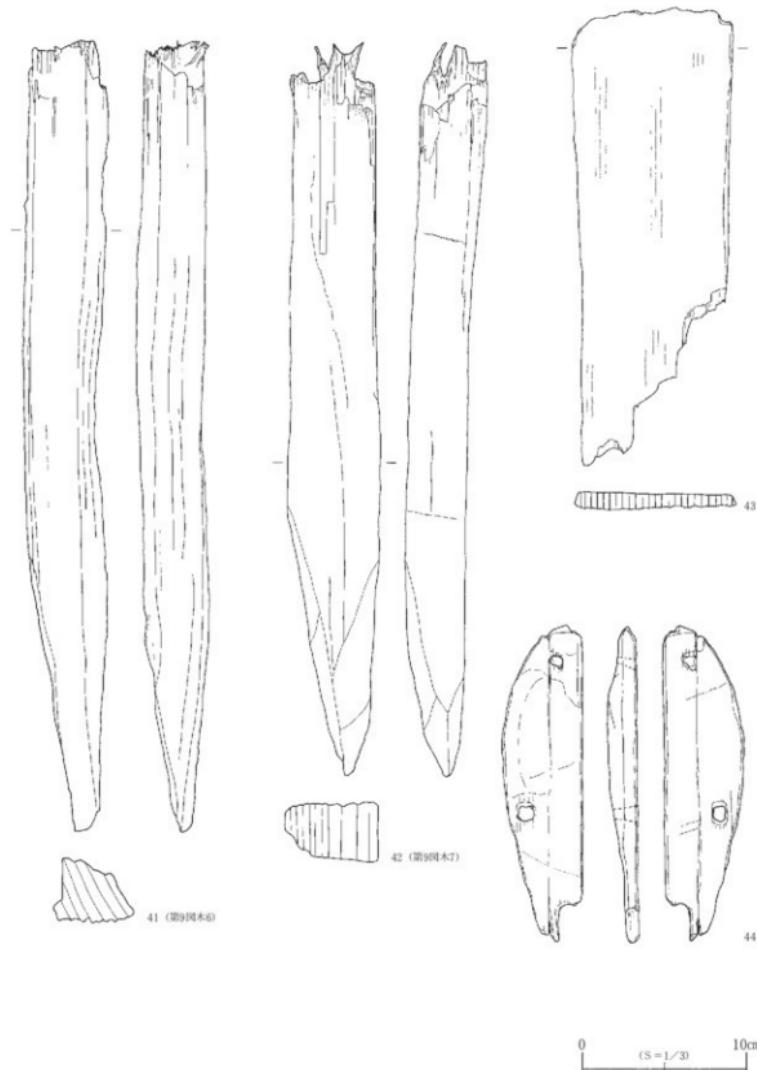
第12図 SD 11溝跡出土遺物図（3）



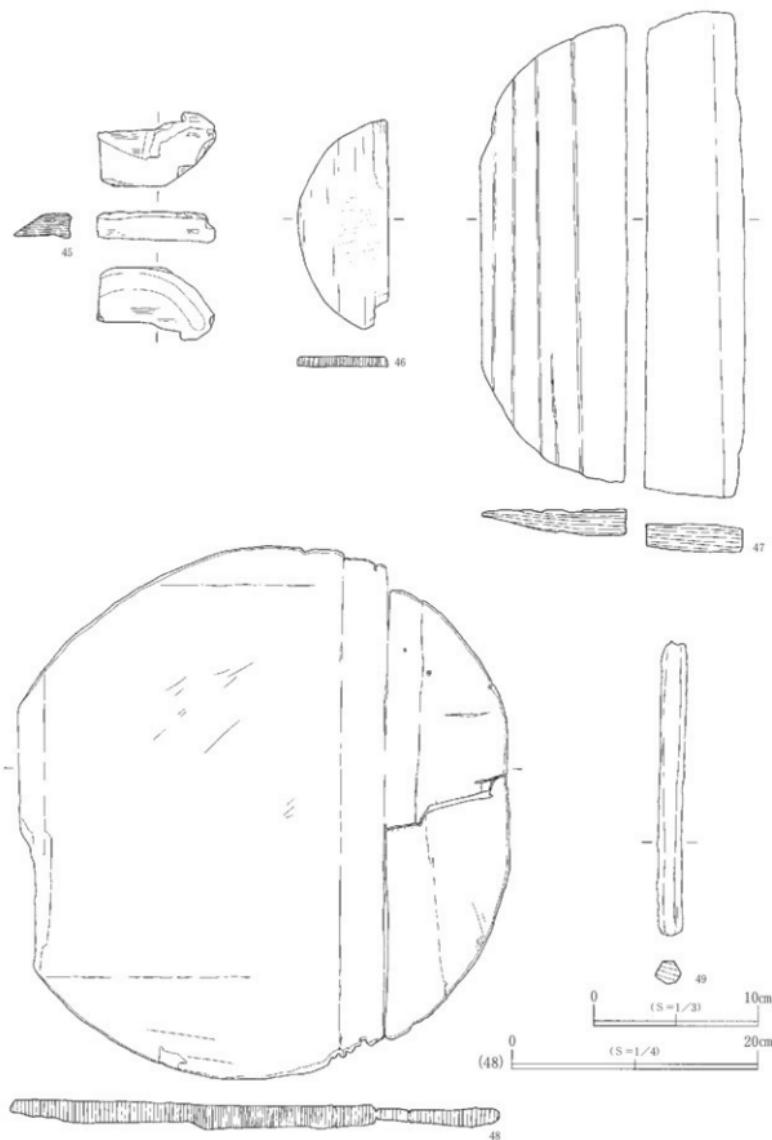
第13図 SD 11溝跡出土遺物図 (4)



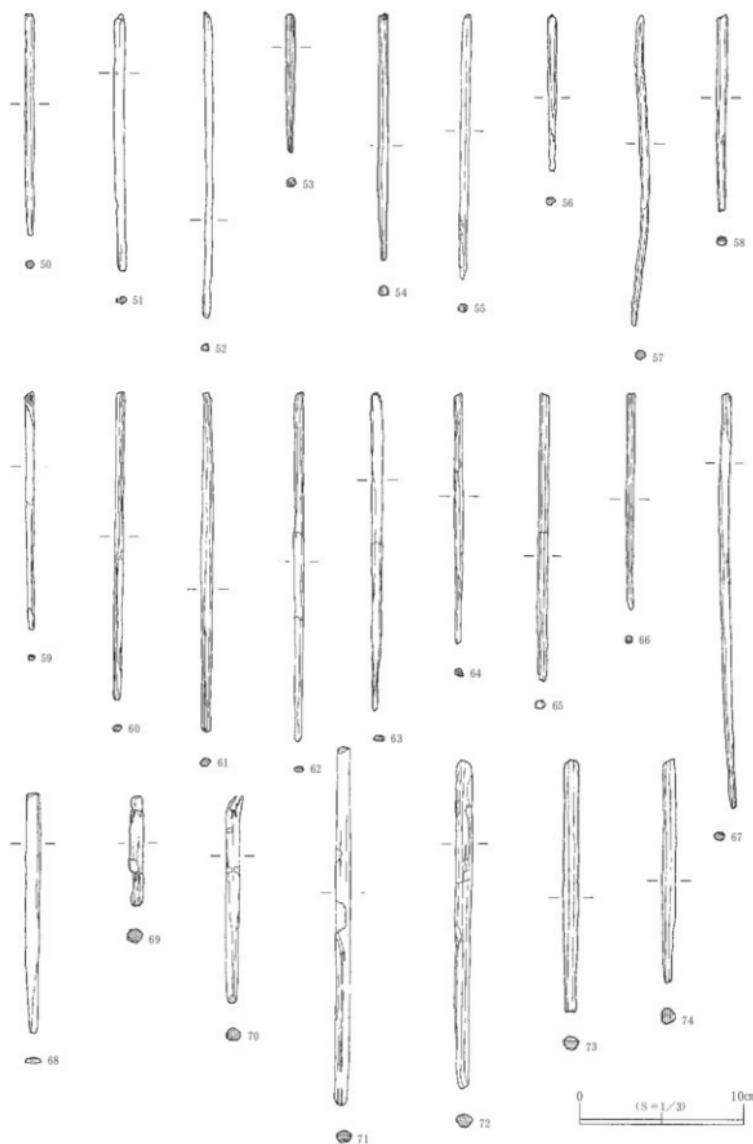
第14図 S D 11溝跡出土遺物図（5）



第15図 SD 11溝跡出土遺物図 (6)



第16図 SD 11溝跡出土遺物図(7)



第17図 SD 11溝跡出土遺物図 (8)

SD 17 (第18~20図、図版3・4・10・11)

〈位置・確認状況〉 LN 46~48、LO 48~53 グリッドに位置し東側調査区を縦断する。第IV層上面で砂質の黒褐色土の筋として確認した。若干蛇行しながら、南端は調査区外へ延びている。削平や搅乱を受けており残存状態は極めて悪く、南側ではその痕跡がうっすらと残る程度であった。

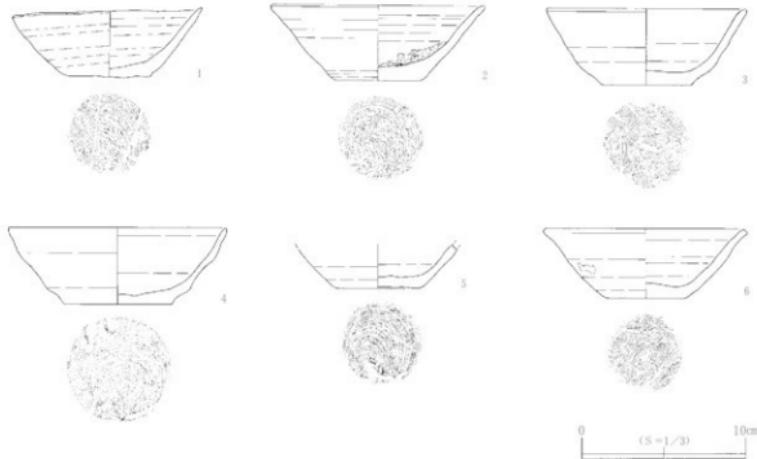
〈重複関係〉 重複はない。

〈堆積土〉 堆積土の残存が極めて少なく、黒褐色のシルト質土に若干の白色砂粒が混じる単層である。

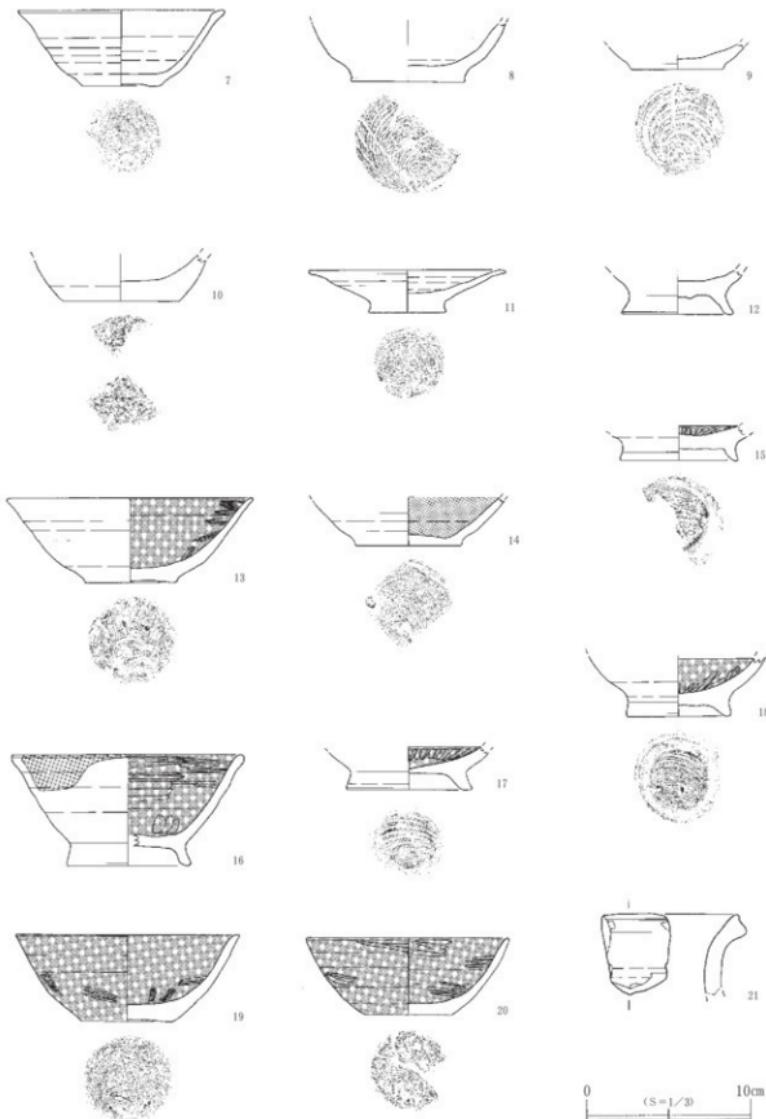
本来の土層の最下部のみ残っている状態と考えられ、詳しくは不明である。

〈平面形・規模〉 確認された総延長は 30.63 m、幅 0.20~1.90 m、掘り込みの深さは 0~0.23 m 程である。北端は消えてしまい、南端は調査範囲外になるので、本来の長さは不明である。底面は丸みを帯び、緩やかに立ち上がる。中ほどに 2 か所溜まり場のような広がりがある。

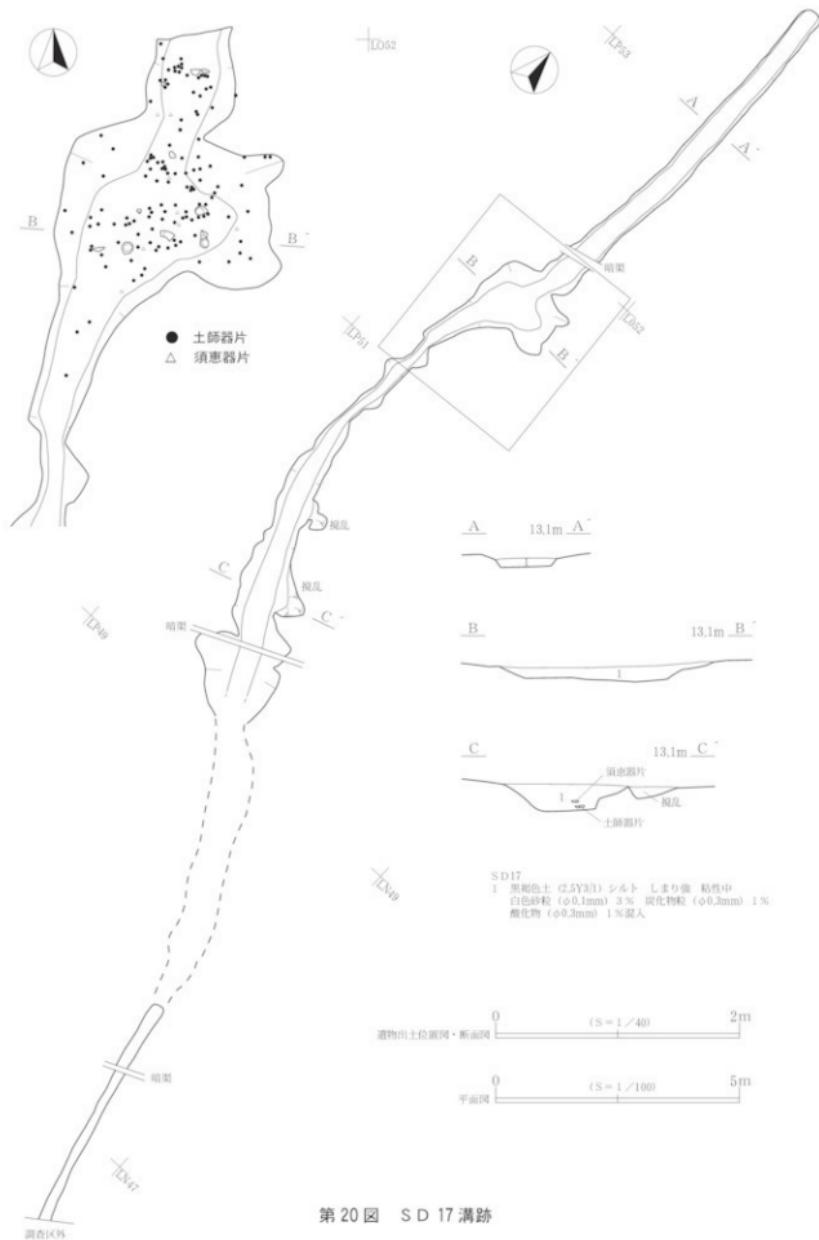
〈出土遺物〉 土師器の环や甕破片 814 点 (4,507.5g)、須恵器破片 24 点 (257.9g)、鉄滓 1 点 (18.6g) が出土した。特に北側の溜まり場からは土師器の环の小片が集中的に出土した。その中から土師器环・皿を 20 点、甕小片 1 点を図示した。环・皿は基本的にロクロ成形で、底部切り離しは回転糸切りである。高台付环の 12 のみヘラ切りで作られている。13~20 は内面にヘラ磨き後黒色処理が成され、15~18 は高台付环である。19・20 は内外両面に磨き、黒色処理が成されている。21 は甕の口縁部でロクロ成形である。須恵器に図示できるものは出土していないが、北側の延長線上から須恵器甕の破片が多量に出土した。便宜上遺構外出土遺物として図示しているが、おそらく SD 17 に包含されていたものと思われる。



第18図 SD 17 溝跡出土遺物図 (1)



第19図 SD 17溝跡出土遺物図(2)



第20図 SD 17溝跡

(3) 杭列

S A44(第21～24図、図版3・4)

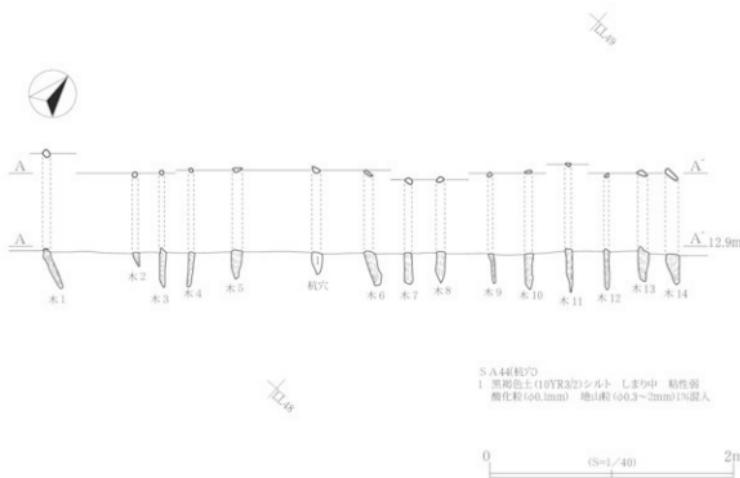
〈位置・確認状況〉 L L 48～49 グリッドに位置する。第IV層上面で1列に並んだ杭の列で確認。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

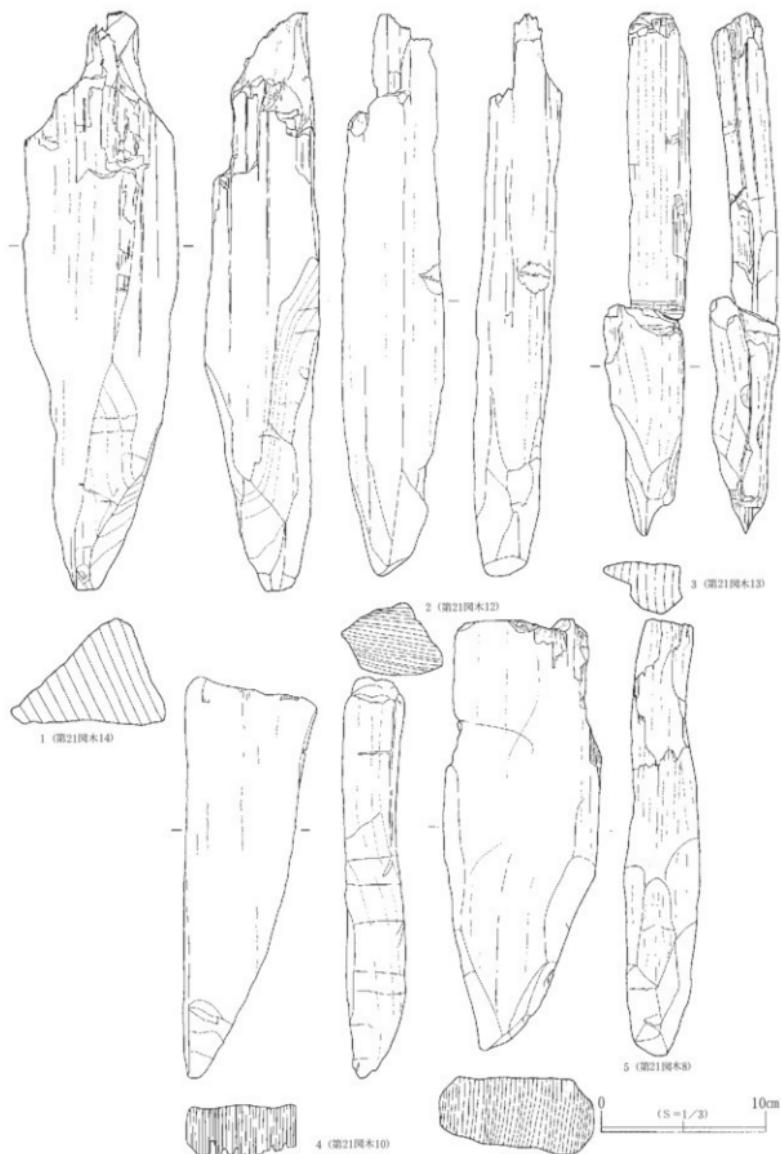
〈堆積土〉 1本のみ木が無く堆積土が見られた。堆積土は単層で、地山ブロックが少量混じる黒褐色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は南西から北東方向への直線状である。全長は5.25mで、15本の杭が並ぶ（うち1本は穴のみ）。各杭間の距離は西から、木1～木2間0.75m、木2～木3間0.25m、木3～木4間0.22m、木4～木5間0.40m、木5～杭穴間0.65m、杭穴～木6間0.45m、木6～木7間0.30m、木7～木8間0.25m、木8～木9間0.44m、木9～木10間0.28m、木10～木11間0.42m、木11～木12間0.23m、木12～木13間0.32m、木13～木14間0.23m。深さは0.14～0.38m程度である。

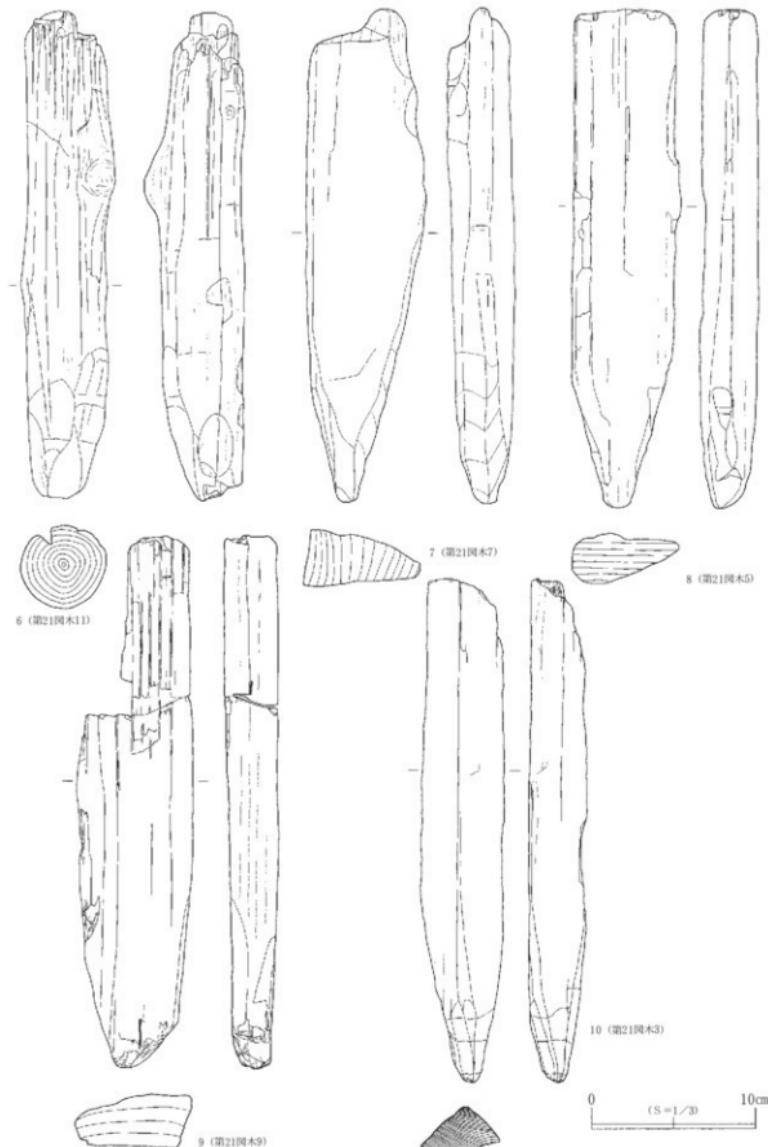
〈出土遺物〉 14本の杭（第22～24図）はクリ材の先端を削り、尖らせたものである。丸材、板材、三角断面のものなど断面形も太さも一定せず、リサイクルされたものを使用したと思われる。



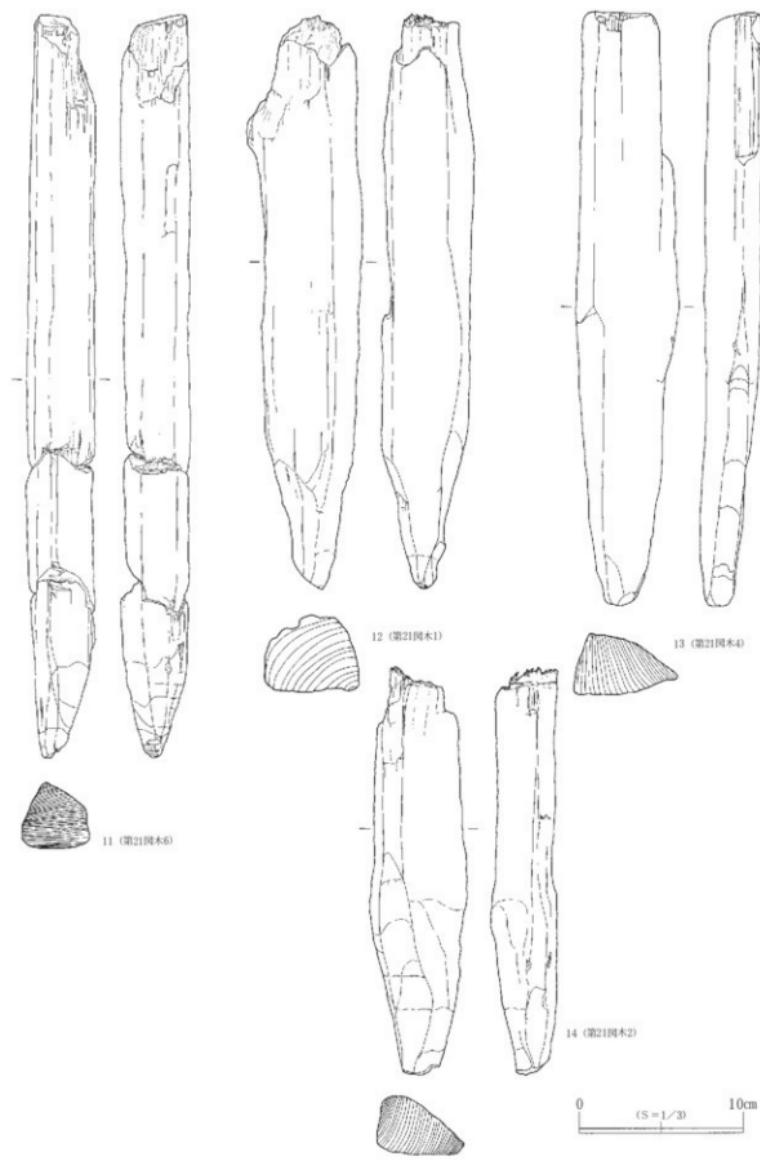
第21図 S A 44 杭列



第22図 S A 44 杭列出土遺物図(1)



第23図 S A 44 杭列出土遺物図 (2)



第24図 SA 44杭列出土遺物図(3)

(4) 土坑

S K 12 (第26図、図版5)

〈位置・確認状況〉 L S 47 グリッドに位置する。第IV層上面で砂質の黒色土の広がりで確認。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 3層に分かれるが、基本的に砂質のオリーブ黒色土である。レンズ状堆積で自然堆積と思われる。

〈平面形・規模〉 平面形は北北西から南南東方向へ長軸をもつ不整形な楕円形である。規模は長軸 1.45 m、短軸 1.35 m、深さ 0.42 m 程である。

〈壁・底面・遺物〉 底面は丸みを帯び、壁は緩やかに外傾しながら立ち上がる。出土遺物はない。

S K 13 (第26図、図版5)

〈位置・確認状況〉 L L 49 グリッドに位置する。第IV層上面で砂質の黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、地山ブロックや白色砂粒を少量含む砂質の黒色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は東西方向へ長軸をもつ楕円形である。規模は長軸 0.85m、短軸 0.44m、深さ 0.20m 程である。

〈壁・底面・出土遺物〉 底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。出土遺物はない。

S K 14 (第25・26図、図版5)

〈位置・確認状況〉 L S 43 グリッドに位置する。確認調査時にトレンチ断面と第IV層上面で S D 11 の砂質の黒色土の広がりの中に確認した。半裁したところ S D 11 とは分かれることが判明した。

〈重複関係〉 S D 11 の西端の落ち込みの中にある。S D 11 に切られており、S D 11 より古い。

〈堆積土〉 堆積土は 3 層からなり、1 層は S D 11 と同質の黒色土だが、2 層、3 層は崩れた地山ブロックを含むシルト質土で砂質を含まない。レンズ状の堆積から自然堆積と思われる。

〈平面形・規模〉 平面形は西北西から東南東方向へ長軸をもつ楕円形である。規模は長軸 1.18m、短軸 0.68 m、深さ 0.35 m 程である。

〈壁・底面〉 底面は丸みを帯び、壁は緩やかに外傾し立ち上がる。

〈出土遺物〉 土師器环片 8 点 (134.2g)、曲物底板破片 2 枚、箸が 3 本出土した。破片が接合され、1 点の墨書き土器となった (第25図1)。側面部に「工」の字の墨書きがある。第25図の2は6角形断面の箸である。

S K 16 (第26図、図版5)

〈位置・確認状況〉 L M 49 グリッドに位置する。第IV層上面で黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複する遺構はないが、南側上面が掻乱を受けている。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、地山ブロックを含む黒色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は南北方向へ長軸をもつ不整楕円形である。規模は長軸 1.3 m、短軸 1.05 m、深さ 0.18 m 程である。

〈壁・底面・出土遺物〉 底面は平坦で、壁は緩やかに立ち上がる。土師器环片 1 点 (4.8g) が出土。

S K 28 (第26図、図版5)

〈位置・確認状況〉 M B 43 グリッドに位置する。S D 11 の南壁が緩やかに広がる面上に、S K 12

と同質の砂質の黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 SD 11 を切っているが、同時期に SD 11 に伴うものであった可能性もある。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、砂質の黒色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は北西から南東方向へ長軸をもつ楕円形である。開口部は長軸 0.62 m、短軸 0.48 m、底部は長軸 0.66 m、短軸 0.53 m、深さ 0.22 m 程である。

〈壁・底面・出土遺物〉 底面は丸みを帯び、壁は緩やかに立ち上がるが、南側は若干プラスコ状に入り込み急傾斜で立ち上がる。出土遺物はない。

SK 37 (第26図、図版5)

〈位置・確認状況〉 L R 44 グリッドに位置する。第IV層上面で砂質の黒褐色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

〈堆積土〉 堆積土は単層で、SK 12 と同質の砂質の黒色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は東北東から西南西方向へ長軸をもつ不整楕円形である。開口部は長軸 0.91 m、短軸 0.65 m、底部は長軸 1.10 m、短軸 0.70 m、深さ 0.68 m 程である。

〈壁・底面・出土遺物〉 底面は丸みを帯び、壁は南西側は急に立ち上がり、北東側はプラスコ状に入り込み急に立ち上がる。出土遺物はない。

SK 43 (第26図、図版5)

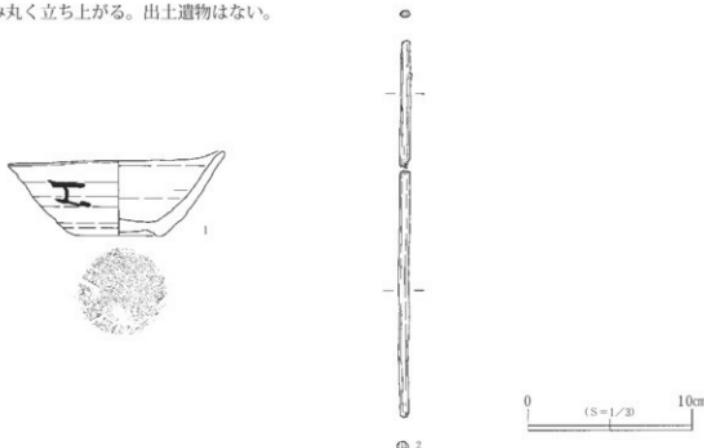
〈位置・確認状況〉 L K 48 グリッドに位置する。第IV層上面で砂質の黒色土の広がりで確認した。

〈重複関係〉 重複関係はない。

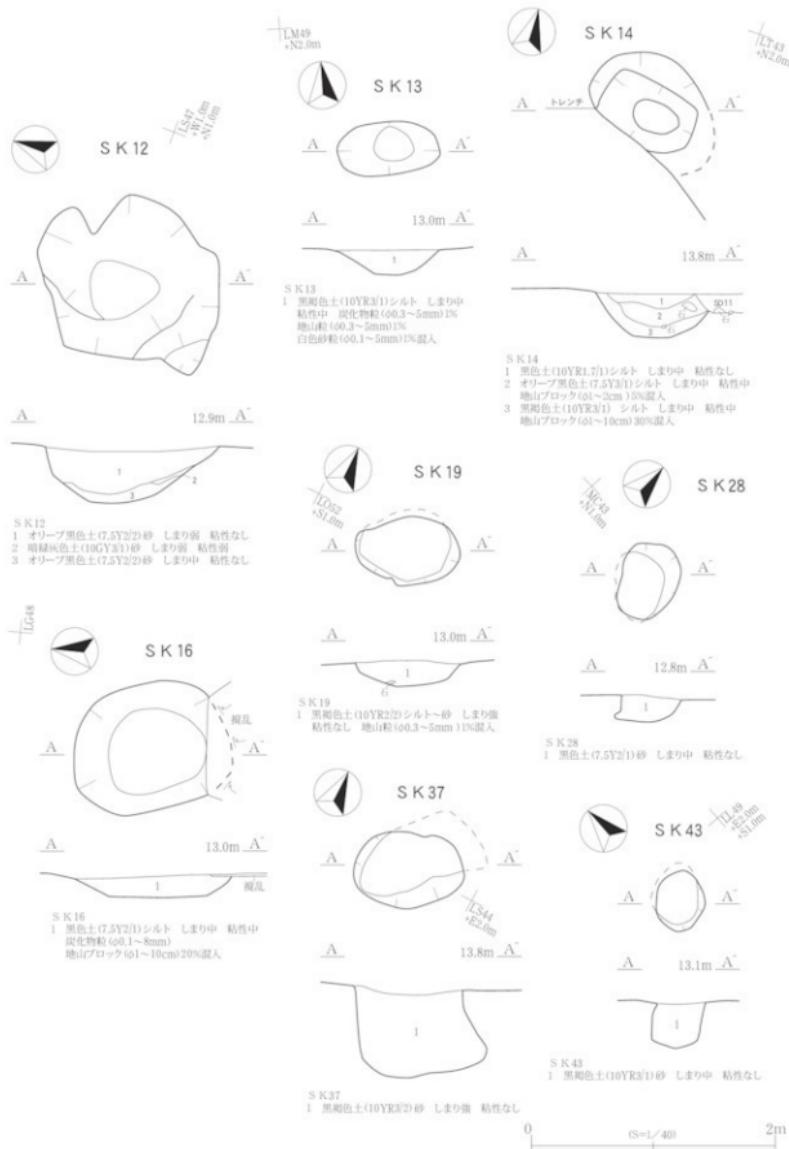
〈堆積土〉 堆積土は単層で、SK 12 と同質の砂質の黒色土である。

〈平面形・規模〉 平面形は北東から南西方向へ長軸をもつ楕円形である。開口部は長軸 0.50 m、短軸 0.39 m、底部は長軸 0.55 m、短軸 0.44 m、深さ 0.35 m 程である。

〈壁・底面・出土遺物〉 底面は丸みを帯び、壁は南側は急に立ち上がり、北側は若干プラスコ状に入り込み丸く立ち上がる。出土遺物はない。



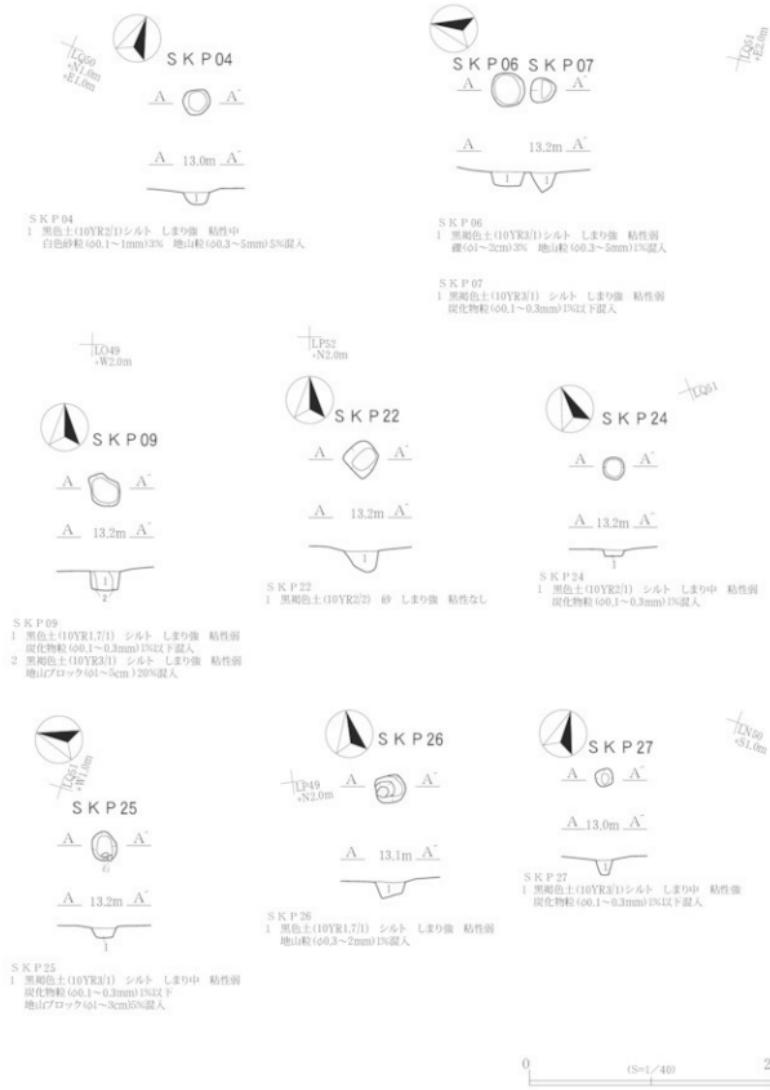
第25図 SK 14 土坑出土遺物図



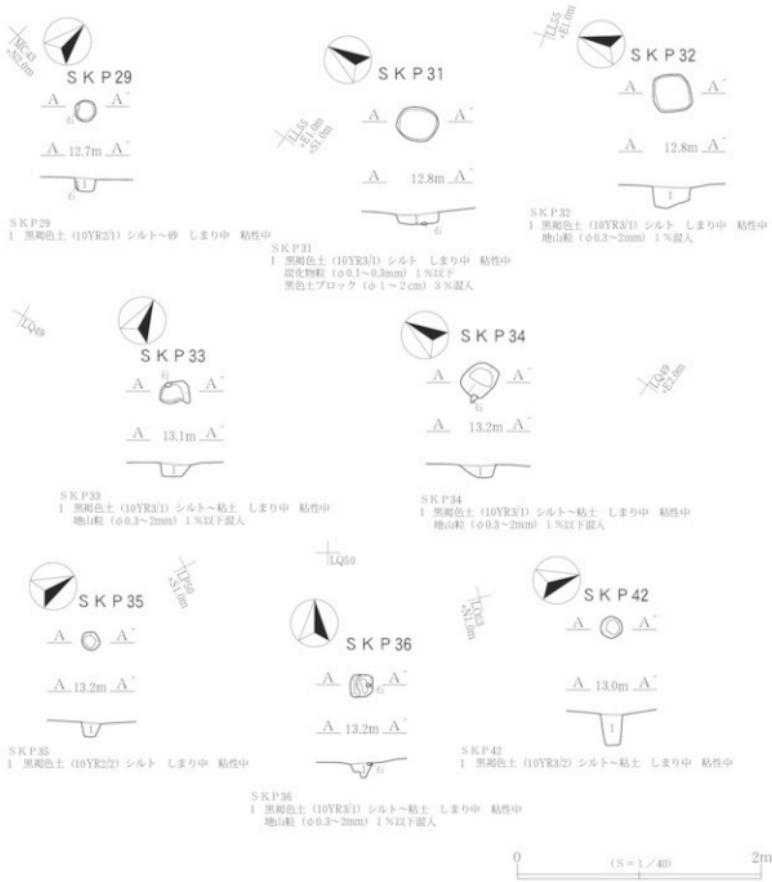
第26図 SK 12・13・14・16・19・28・37・43 土坑

(5) 柱穴様ピット(第27・28図)

調査区内から計17基の柱穴様ピットが検出された。その全てのものを図下し第3表として一覧にした。



第27図 SKP 04・06・07・09・22・24・25・26・27 柱穴様ピット



第3表 柱穴様ピット計測一覧表

柱穴番号	グリッド	規模 (m)			底面標高 (m)	備考	柱穴番号	グリッド	規模 (m)			底面標高 (m)	備考
		長軸	短軸	深さ					長軸	短軸	深さ		
04	L P50	0.21	0.21	0.10	12.66		29	MB43	0.17	0.17	0.10	12.40	
06	L P51	0.28	0.28	0.10	12.90		31	L K54	0.33	0.28	0.08	12.45	
07	L P51	0.21	0.20	0.15	12.85		32	L K54	0.31	0.31	0.17	12.34	
09	LO48	0.27	0.24	0.16	12.76		33	L P49	0.23	0.18	0.10	12.80	
22	LO52	0.32	0.28	0.17	12.76		34	L P49	0.30	0.25	0.10	12.82	
24	L Q50	0.17	0.17	0.05	12.96		35	L P49	0.15	0.15	0.12	12.82	
25	L Q50	0.24	0.20	0.08	12.94		36	L P49	0.18	0.18	0.12	12.84	
26	LO49	0.24	0.22	0.14	12.78	土師器1片出土	42	L N53	0.18	0.18	0.25	12.54	
27	L N49	0.15	0.15	0.12	12.62								

第28図 SKP 29・31・32・33・34・35・36・42 柱穴様ピット

(6) 遺構外出土遺物(第29～38図、図版9・11～14)

遺構外では縄文土器破片1点(3.0g)、剥片石器1点(28.0g)、土師器の壺や甕破片4,994点(39,774.8g)、須恵器壺・甕破片875点(25,113.0g)、支脚破片85点(718.3g)、中世から近代までの陶磁器54点(994.3g)、刀子など鉄製品8点(214.3g)、銭貨3点(5.7g)、羽口破片26点(540.8g)、鉄滓50点(2,696.6g)、火錐板や下駄など木製品30点、板材破片133点、杭など棒状のものが41点、用途不明木材43点が出土した。これらのほとんどは東西の溝跡周辺から出土しており、多くは本来溝跡の中に包含されていたものが削平により耕作土内に紛れ込んだと考えられる。

1 刻片石器(第29図、図版14) 縄文時代の石匙1点が出土した。縦型台形状のもので、刃部は片面調整だが、持ち手側は両面調整を行っている。先端部は欠損している。本遺跡の北北東1kmの山側に縄文時代の遺物包含地黒渕遺跡があり、縄文土器破片も含め流れ込みと思われる。

2 土師器(第29・30図、図版11)

土師器壺は細片ばかりで形になるものが少なく、底部が残るもの16点を図示した。全体が残るものなく器形は不明だが、全てロクロ成形で底部切り離しは高台付壺内黒の1点以外は全て回転糸切りである。10・11は内外面に煤が付着しており灯明皿に使用された可能性がある。12は高台付壺で糸切り後高台部分を取り付け指ナデで整えている。13・14・15は底部が厚く柱状高台となっている。16・17は高台付壺で内面が黒色処理されており、17は回転ヘラ切りの切り離しである。

土師器甕の出土量は少なく3点の口縁部と2点の底部のみ図示した。口縁部の18・19・20は共にロクロ成形で、口頸部が外傾する。20は外面をヘラでロクロ調整している。21は回転糸切りの小型甕。22は唯一非ロクロ成形のもので底部しか出土していないが、外面はハケ目調整され、内面には輪積み痕と平行アテ具痕、底部には筵敷痕が残っている。

3 須恵器(第31～36図、図版11～13)

須恵器壺は8点を図示した。全てがロクロ成形で、底部切り離しは回転ヘラ切りである。23～26はヘラ切り後、軽いナデ調整を施している。27～30は台周縁にナデ調整を施す台付壺である。30には底面に×のヘラ記号がある。須恵器壺・甕はS D17北端のすぐ先から集中的に出土した。溝の掘込みは途切れているが、おそらく削平時にSD17内より散乱したものと思われる。32は外面に平行タタキ目とその上に回転カキ目、内面には青海波アテ具痕が残る壺で、底部は丸底である。31・33・34も同様に外面平行タタキ目、内面青海波アテ具痕が残るおそらく同一個体の壺の胴部である。35・36も不明瞭ではあるが、外面平行タタキ目、内面青海波アテ具痕があるが、35の外面には植物をこよった紐状のものを巻き付けた痕と思われる沈線が2本残る。36は造りや硬さは須恵器だが胎土が赤褐色を呈する。37・38は外面が平行タタキ目、内面には平行アテ具痕を残す。39・40は同一個体で外面が平行タタキ目、内面に不明瞭なアテ具痕を残している。41・42は同一個体で外面に砂粒が多く付着し、タタキ目の上にカキ目調整が成されている。43は内面に青海波アテ具痕が残るが、外面にタタキ目がなく植物の紐によると見られる圧痕2本が交差する沈線が残る。44～46はロクロ成形の高台付甕底部で内外面ともにロクロナデである。46の内面には自然釉が掛かる。47は底面に×のヘラ記号があり、その底面を転用し硯としている。48～50は口縁部でいずれもロクロ成形である。48には外面に、49は内面に自然釉が掛かる。51・52は小型の壺で内外面にロクロカキ目調整が成され外面に自然釉が掛かる。53・54は同一個体の長頸瓶の破片である。55～57扁平状のツマミのつく蓋で、57の上面には判読不

能(才偏と思われるが)の墨書がある。

4 土製品(第36図、図版14)

58は支脚上部で外面は無調整で輪積み痕が残り、内面には平行アテ具痕が見られる。上面には窓敷痕がかすかに認められる。

5 木製品(第37図、図版9・14)

木製品も同様に溝跡周辺を中心に火錐板が2点、下駄2点、漆腕破片1点、檜扇1点、浮子1点、箸11点、有孔木製品4点、曲物側板2点、曲物蓋・底板9点、板状木製品133点、杭・棒状木製品22点、木片43点が出土した。59・60は火錐板である。60には角材に火錐による表面が焦げた穴が表に7個、裏に1個開けられており、穴の底部には火の粉を落とす切り込みも認められる。59には6個の穴が認められる。61・62は楕円形を呈する連歯下駄である。63は漆が表面に残る椀の破片である。板状木製品は多数出土したが、明らかな加工痕の残る物を図示した。64は直径5cm程で、中央に5mmの孔を持つ薄い板である。65は檜扇の下部である。67～69は曲物蓋で大小様々である。蓋に比べ量が少なかつたが曲物側板も出土しており、66は杉を利用し曲げるために縦方向の切り込みを6mm間隔でいれている。71・72は有孔木製品で、71は両端に菱形の木釘穴が開き、片方の穴には木釘が差し込まれたまま残っていた。72はヘラ状に加工した部分に孔を開けている。73は浮子で先端部に紐を結び付けるための切り込みをもつ。74の棒状木製品は使途不明だが先端を細く加工し、一辺に鋸状の切り込みをかれている。

6 金属製品・鍛冶関連遺物

(1) 金属製品(第38図、図版13)

75・76は刀子である。75は大型の小刀で柄に木部取付用の穴が開く。表面の鋸に木片の痕が残る。

77・78は使途不明な棒状鉄製品である。

(2) 鍛冶関連遺物(第38図、図版13)

80は平面形が楕円形で、下面が丸みを帯び、緩やかな底面をもつ椀形鍛冶滓である。木炭痕などは認められなかった。79も同じような特徴を持つ椀形鍛冶滓の破片である。81は表面が滑らかで右へ波打ちながら流れる流动滓破片である。裏面は黒く煤いている。82は破面に閉まれた流动滓破片。平坦に渦巻き状に流动しておりやや大きめの気泡を多く持っている。83は先端部分の上面のみ復元できた羽口である。先端部が一様にガラス質化しており、孔は直径4cmほどで内部に煤が残っている。

7 中世以降の遺物

(1) 陶器(第38図、図版14)

84～86は珠洲系陶器の腰脇部破片である。84はロクロナデ調整後内面に卸し目をいれている。

85・86は外面に平行タタキ後ロクロカキ目調整を行い、内面にはアテ具痕は無く丁寧なナデ調整をしている。

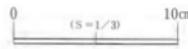
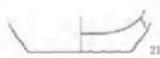
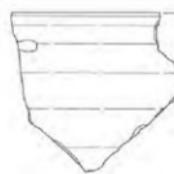
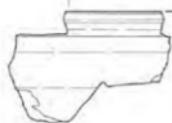
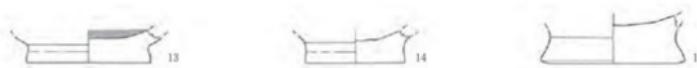
87は鉢底部破片で底部に回転糸切り痕が残り外面に釉垂れがある。17世紀前半以降の江戸時代の陶器と思われる。

(2) 銭貨(第38図)

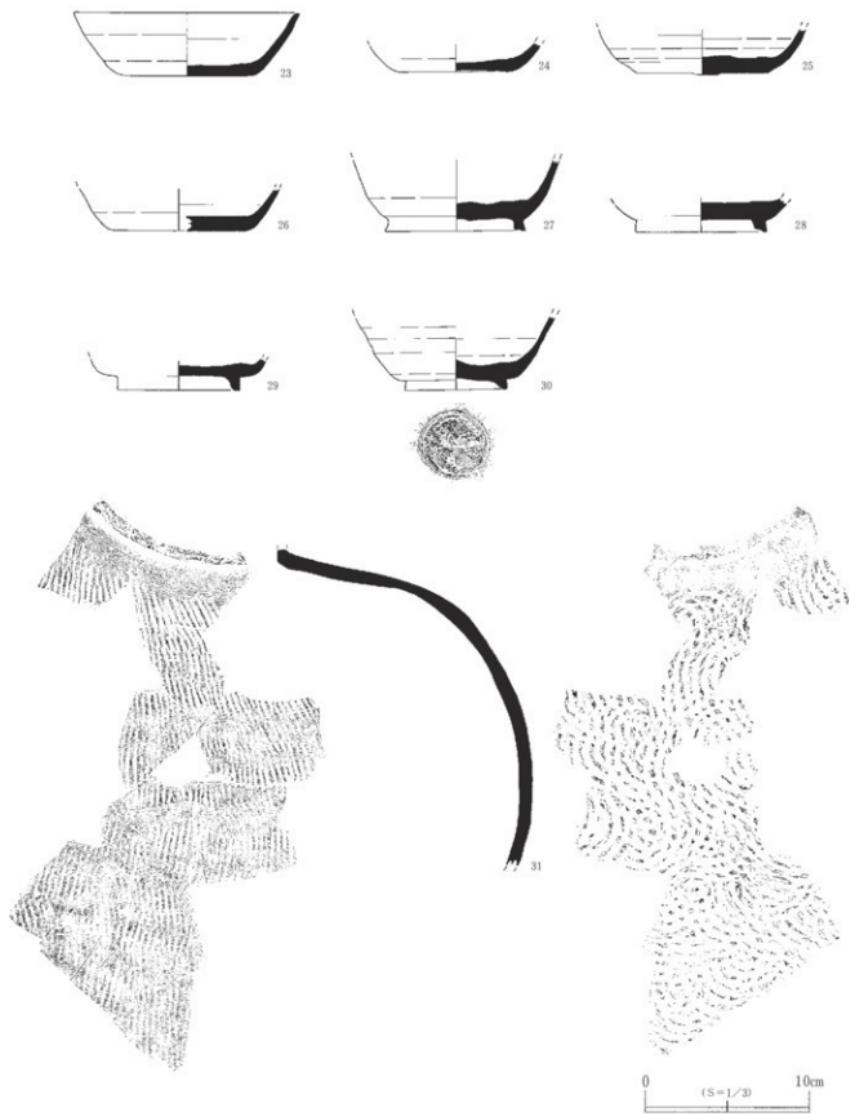
2種類の渡来銭が出土した。88は北宋銭の皇宋通寶。89・90は明銭の洪武通寶である。いずれも大きさや重さから模鋳銭と考えられる。



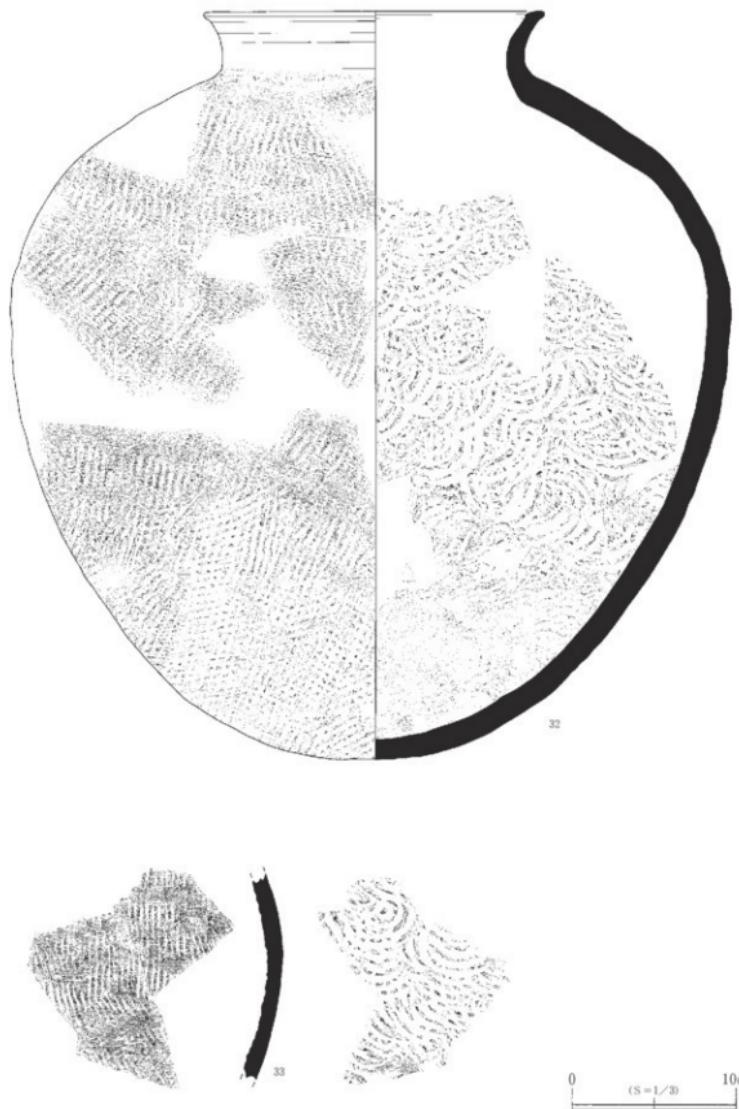
第29図 遺構外出土遺物(1)



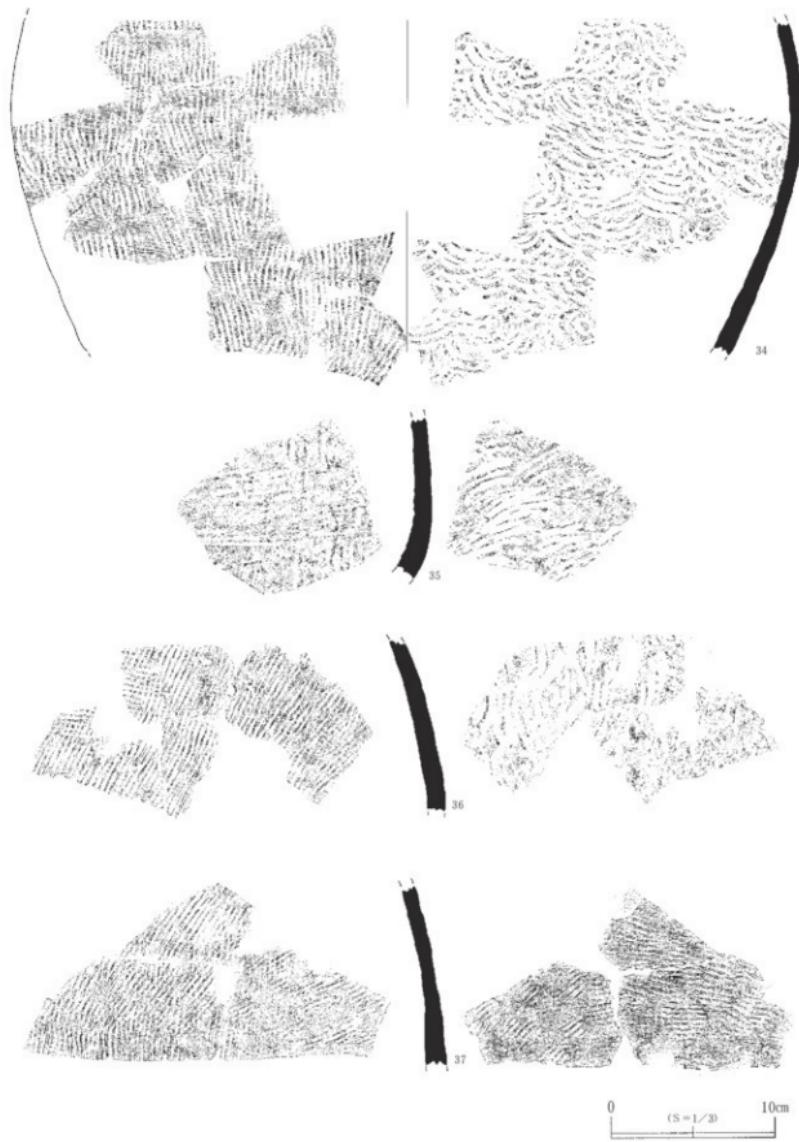
第30図 造構外出土遺物（2）



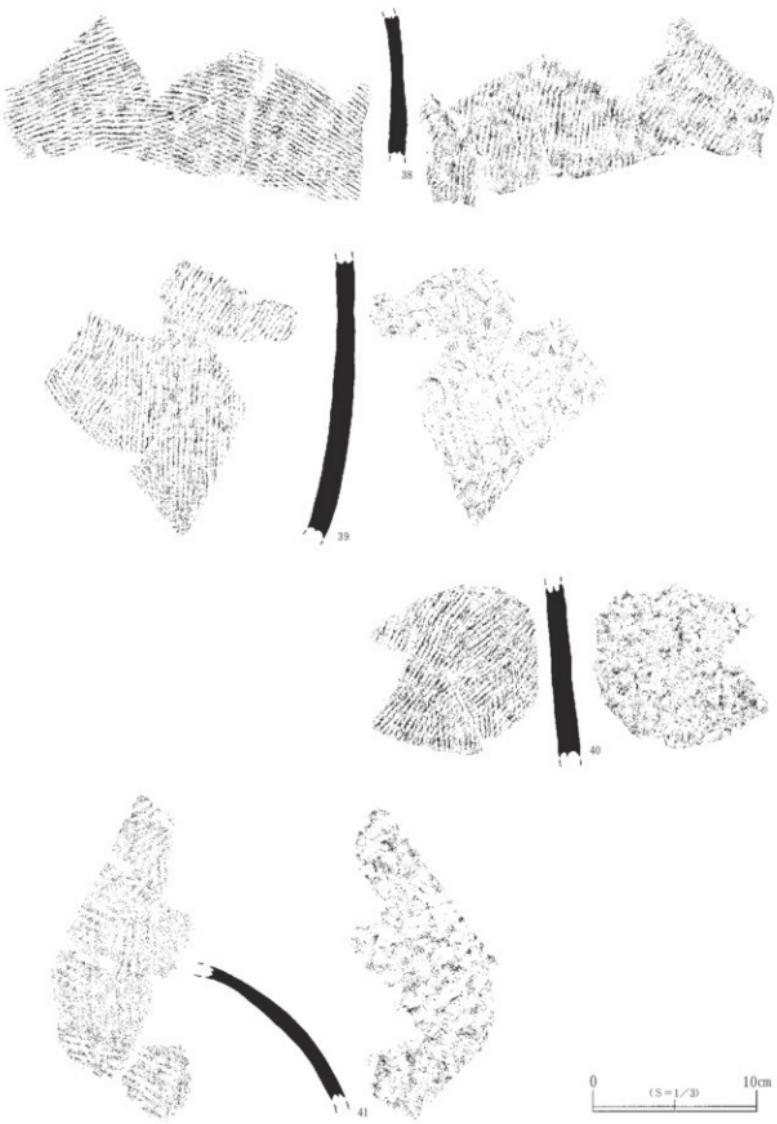
第31図 遺構外出土遺物（3）



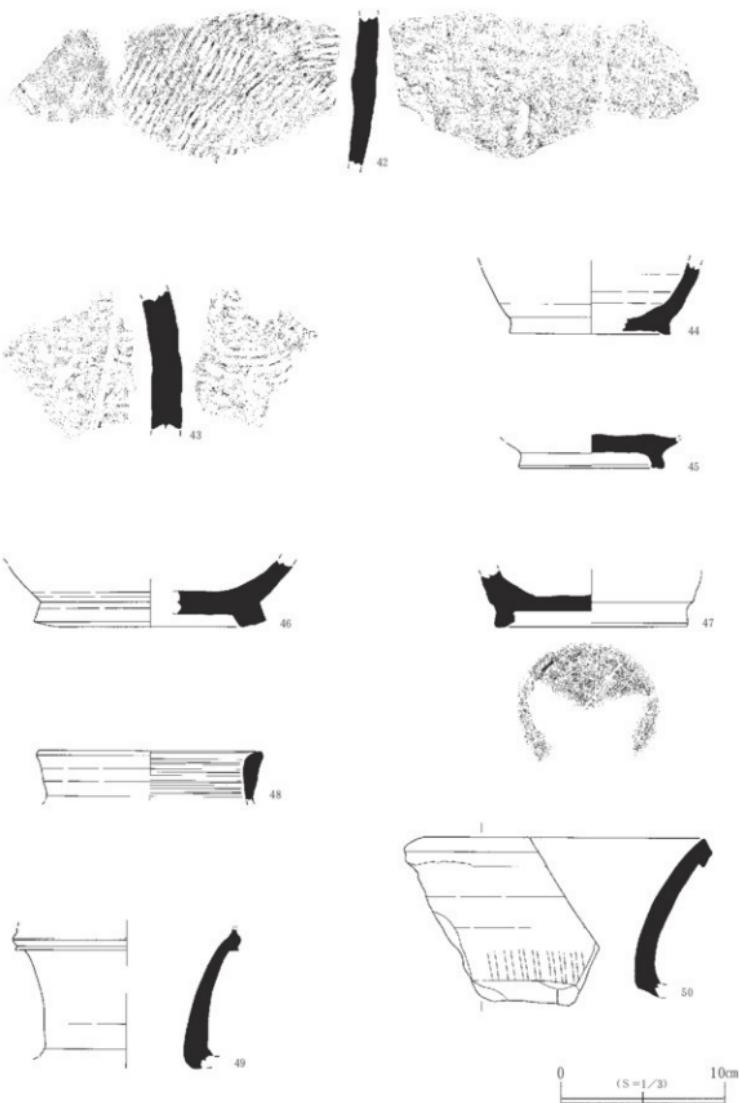
第32図 遺構外出土遺物（4）



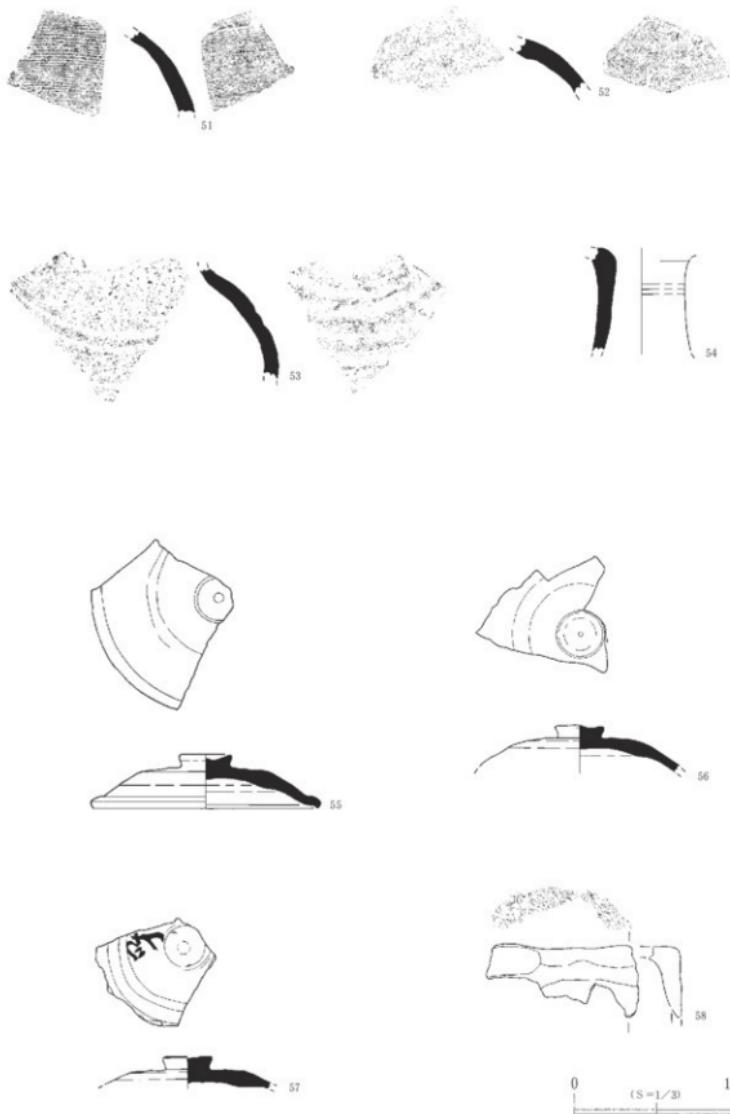
第33図 遺構外出土遺物（5）



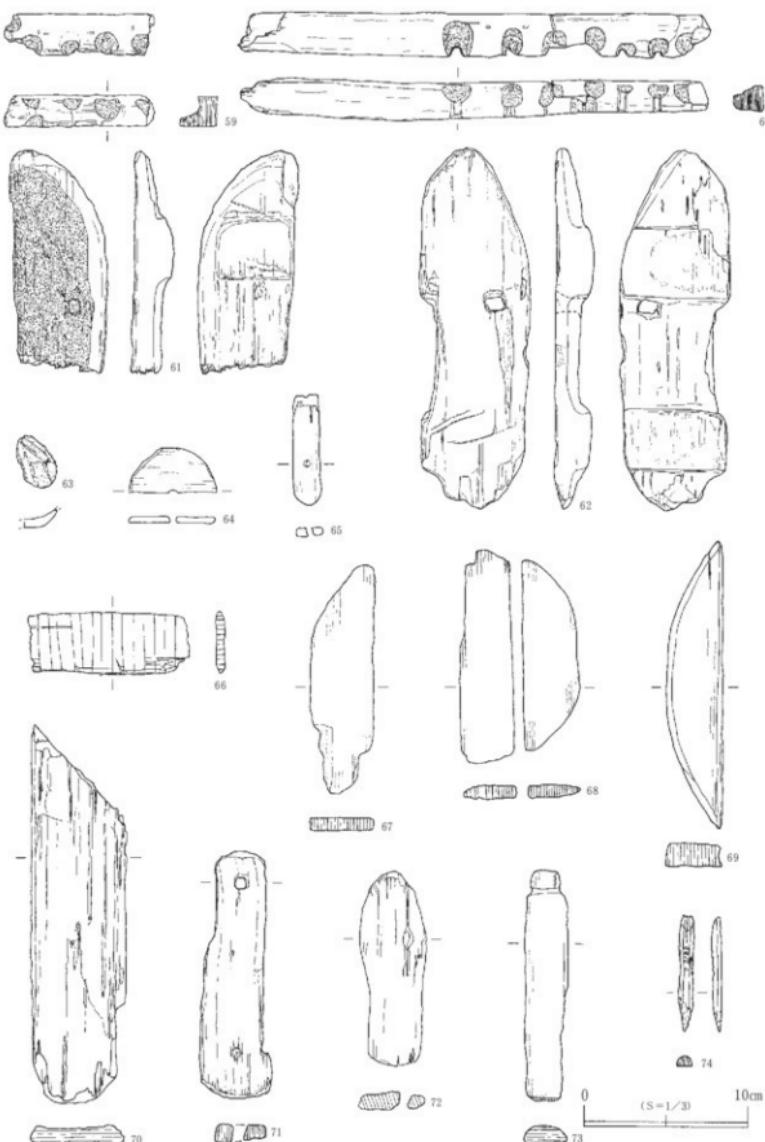
第34図 遺構外出土遺物（6）



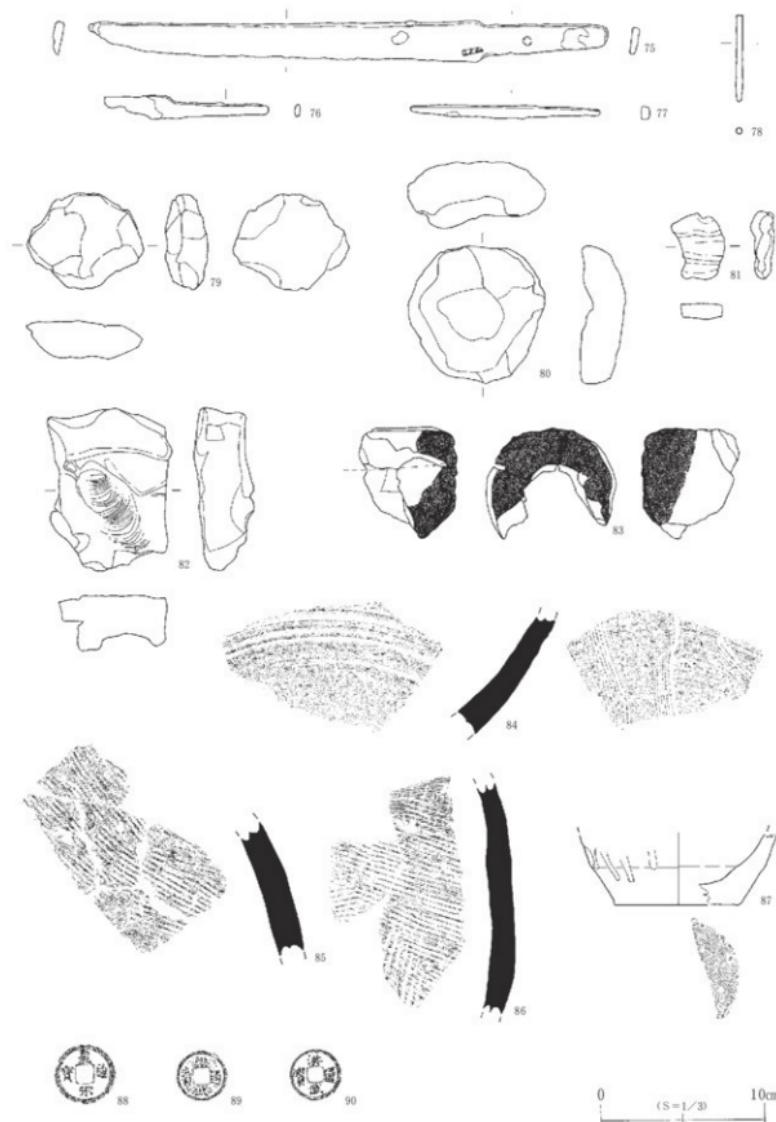
第35図 遺構外出土遺物（7）



第36図 造構外出土遺物（8）



第37図 遺構外出土遺物（9）



第38図 遺構外出土遺物 (10)

第4表 出土遺物観察表

検出番号	品目	種別	器種	出土位置	特徴	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	底径倍数	高径倍数	国際番号	
10	1	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	13.0	5.8	4.9	0.45	37.7	6	
10	2	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	13.4	5.5	4.2	0.41	31.3	6	
10	3	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	12.6	5.2	4.5	0.41	35.7	6	
10	4	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	13.2	5.2	4.6	0.39	34.8	6	
10	5	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	12.8	5.4	4.3	0.42	33.6	6	
10	6	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	13.2	5.8	4.8	0.44	36.4	6	
10	7	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	13.5	5.7	4.5	0.42	33.3	6	
10	8	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側：ロクロナデ、底面欠損	13.0	6.2	3.9	0.48	30.0	6	
11	9	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	12.6	5.0	4.6	0.40	36.5	7	
11	10	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	12.0	4.4	4.5	0.37	37.5	7	
11	11	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	12.3	5.1	3.2	0.41	42.3	7	
11	12	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	—	4.6	(3.1)	—	—	—	
11	13	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	—	5.6	(2.3)	—	—	—	
11	14	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	—	5.1	(2.7)	—	—	—	
11	15	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	—	5.2	(2.5)	—	—	—	
11	16	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	—	6.0	(3.0)	—	—	—	
11	17	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ、底面あり	12.8	6.4	3.9	0.50	30.5	7	
11	18	土器類	瓶	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ、底面あり	9.5	4.9	1.9	0.52	20.0	—	
11	19	土器類	高台付环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ、底面あり	—	6.0	1.4	—	—	—	
11	20	土器類	高台付环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り・底面、内面：ロクロナデ	14.2	6.7	5.0	0.47	35.2	7	
11	21	土器類	高台付环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り・底面、内面：ロクロナデ	14.0	5.8	5.5	0.41	39.3	7	
11	22	土器類	高台付环	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り・底面、内面：ロクロナデ、底面あり	—	5.7	(2.0)	—	—	—	
11	23	土器類	盆	SD11	外面：ロクロナデ・内面：今日 盆複数	—	—	10.2	—	—	—	
11	24	土器類	瓶	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り・底面、内面：ロクロナデ	—	5.0	(2.0)	—	—	—	
11	25	土器類	瓶	SD11	外面：ロクロナデ・内側無切り・底面、内面：ハタ目、底面：葉茎直	—	7.4	(1.8)	—	—	—	
11	26	土器類	瓶	SD11	外面：タタキ目、内面：アマ貝殻、底面：丸底	—	—	(3.2)	—	—	7	
12	27	土器類	瓶	SD11	外面：タタキ目、上口：アマ貝殻、内面：アマ貝殻、指ナメ	—	—	—	—	—	8	
12	28	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側へたり、内面：ロクロナデ	12.6	8.0	3.2	0.63	25.4	7	
12	29	土器類	环	SD11	外面：ロクロナデ・内側へたり、内面：ロクロナデ、内側中空	—	7.0	3.1	—	—	—	
12	30	土器類	壶	SD11	外面：タタキ目・ロクロナデ、内面：ロクロナデ	—	—	8.7	—	—	8	
12	31	土器類	壶	SD11	外面：ロクロナデ、内面：ロクロナデ・泥輪施	—	—	—	—	—	—	
12	32	土器類	壶	SD11	外面：ロクロナデ・内側中空、内面：ロクロナデ、内面に茎葉あり	—	—	高さ：(2.5)	—	—	8	
13	33	木製品	木環	SD11	輪筋内側：輪筋外側	—	—	(8.3)	—	—	8	
13	34	木製品	木環	SD11	輪筋内側：輪筋外側	—	—	(5.0)	—	—	8	
13	35	木製品	板厚材	SD11	一端斜め、斜め面：輪筋	長さ：117.0、幅：18.0、厚さ：4.9	—	—	—	—	—	—
13	36	木製品	机	SD11	四脚から立ちせる、第9回の木1	長さ：1,64.2、幅：5.8、厚さ：4.1	—	—	—	—	—	—
13	37	木製品	机	SD11	二面から立ちせる、一部削化、第9回の木2	長さ：1,66.3、幅：5.6、厚さ：3.6	—	—	—	—	—	—
14	38	木製品	机	SD11	四脚から立ちせる、第9回の木3	長さ：1,67.0、幅：5.6、厚さ：4.5	—	—	—	—	—	—
14	39	木製品	机	SD11	二面から立ちせる、第9回の木4	長さ：1,69.0、幅：5.5、厚さ：5.5	—	—	—	—	—	—
14	40	木製品	机	SD11	二面から立ちせる、第9回の木5	長さ：1,73.6、幅：4.5、厚さ：2.1	—	—	—	—	—	—
15	41	木製品	机	SD11	二面から立ちせる、第9回の木6	長さ：1,58.2、幅：4.9、厚さ：3.7	—	—	—	—	—	—
15	42	木製品	机	SD11	二面から立ちせる、第9回の木7	長さ：1,44.5、幅：5.7、厚さ：3.8	—	—	—	—	—	—
15	43	木製品	板厚木	SD11	一端斜め、斜め面：輪筋	長さ：26.9、幅：9.8、厚さ：1.1	—	—	—	—	—	—
15	44	木製品	下盤	SD11	左足形、一部火痕	長さ：19.0、幅：4.9、厚さ：1.8	—	—	—	—	—	8
16	45	木製品	高台付机	SD11	八半火痕、Y字形の切り込み	長さ：4.3、幅：1.2、厚さ：1.9	—	—	—	—	—	8
16	46	木製品	曲物底板	SD11	木釘1	長さ：12.5、幅：5.5、厚さ：0.6	—	—	—	—	—	9
16	47	木製品	曲物底板	SD11	木釘2	長さ：29.7、幅：14.8、厚さ：1.7	—	—	—	—	—	—
16	48	木製品	曲物面	SD11	下曲面断面に木板に反して切り込みがあり加工途中と思われる	長さ：43.5、幅：40.0、厚さ：2.0	—	—	—	—	—	9
16	49	木製品	神具	SD11	断面形が八角形、神具	長さ：18.0、幅：1.6、厚さ：1.3	—	—	—	—	—	—
17	50	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：13.5、幅：5.5、厚さ：0.5	—	—	—	—	—	8
17	51	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：15.7、幅：0.6、厚さ：0.4	—	—	—	—	—	8
17	52	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：18.7、幅：0.4、厚さ：0.4	—	—	—	—	—	8
17	53	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：8.4、幅：0.5、厚さ：0.5	—	—	—	—	—	8
17	54	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：15.0、幅：0.5、厚さ：0.6	—	—	—	—	—	8
17	55	木製品	机	SD11	下部折筋	長さ：16.1、幅：0.5、厚さ：0.5	—	—	—	—	—	8
17	56	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：9.5、幅：0.5、厚さ：0.4	—	—	—	—	—	8
17	57	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：19.0、幅：0.5、厚さ：0.6	—	—	—	—	—	8
17	58	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：11.9、幅：0.6、厚さ：0.6	—	—	—	—	—	8
17	59	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：14.5、幅：0.4、厚さ：0.3	—	—	—	—	—	8
17	60	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：18.8、幅：0.5、厚さ：0.4	—	—	—	—	—	8
17	61	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：20.7、幅：0.5、厚さ：0.5	—	—	—	—	—	8
17	62	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：21.3、幅：0.6、厚さ：0.3	—	—	—	—	—	8
17	63	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：19.4、幅：0.6、厚さ：0.3	—	—	—	—	—	8
17	64	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：15.3、幅：0.5、厚さ：0.4	—	—	—	—	—	8
17	65	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：17.6、幅：0.6、厚さ：0.5	—	—	—	—	—	8
17	66	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：13.2、幅：0.5、厚さ：0.5	—	—	—	—	—	8
17	67	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：25.3、幅：0.6、厚さ：0.5	—	—	—	—	—	8
17	68	木製品	机	SD11	上部折筋、下部尖る、楕円	長さ：14.7、幅：1.6、厚さ：0.2	—	—	—	—	—	8
17	69	木製品	机	SD11	上部折筋、鋸みあり	長さ：1.67、幅：0.8、厚さ：0.8	—	—	—	—	—	8
17	70	木製品	机	SD11	上部折筋、尖棒状	長さ：1.27、幅：0.6、厚さ：0.7	—	—	—	—	—	8
17	71	木製品	机	SD11	角棒状	長さ：21.9、幅：0.6、厚さ：0.7	—	—	—	—	—	8
17	72	木製品	机	SD11	—	長さ：20.1、幅：1.6、厚さ：0.8	—	—	—	—	—	8
17	73	木製品	机	SD11	暗褐色折筋	長さ：15.4、幅：0.6、厚さ：0.8	—	—	—	—	—	8
17	74	木製品	机	SD11	上部折筋	長さ：1.56、幅：0.8、厚さ：1.0	—	—	—	—	—	8
18	1	土器類	环	SD17	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ	11.4	5.0	4.4	0.44	38.6	10	
18	2	土器類	环	SD17	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ・底面無	12.8	5.2	4.6	0.41	35.9	10	
18	3	土器類	环	SD17	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ・底面無や少く	12.2	5.4	4.7	0.44	38.5	10	
18	4	土器類	环	SD17	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ・底面無や多く、少く摩滅	13.2	6.6	4.7	0.50	35.6	10	
18	5	土器類	环	SD17	外面：ロクロナデ・内側無切り、内面：ロクロナデ・底面無や多く、少く摩滅	—	5.2	(2.7)	—	—	—	

標識番号	高さ	種別	種類	出土位置	特徴	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	底径倍数	高径比	国際番号
18	6	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	13.3	4.8	4.3	0.36	32.3	10
19	7	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	12.6	4.6	4.6	0.37	36.5	10
19	8	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	6.8	3.8	—	—	—
19	9	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	5.6	(1.4)	—	—	—
19	10	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	7.0	(2.9)	—	—	—
19	11	土師器	環	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	12.0	4.6	2.6	0.38	21.7	10
19	12	土師器	高台付环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	6.8	(2.7)	—	—	—
19	13	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	14.8	5.6	5.2	0.38	35.1	10
19	14	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	6.4	(3.0)	—	—	—
19	15	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	7.0	(2.1)	—	—	—
19	16	土師器	高台付环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台、内面：ロクロナデー・回転糸切り・高台	14.2	7.4	6.7	0.52	47.2	11
19	17	土師器	高台付环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台、内面：ロクロナデー・回転糸切り・高台	—	7.6	2.6	—	—	—
19	18	土師器	高台付环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台、内面：ロクロナデー・回転糸切り・高台	—	6.4	(3.7)	—	—	—
19	19	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	13.6	5.6	3.3	0.41	39.0	11
19	20	土師器	环	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り・ミガキ・黑色施釉、内面：ロクロナデー・回転糸切り・ミガキ・黑色施釉	12.3	5.2	4.7	0.42	38.2	11
19	21	土師器	環	SD17	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	—	—	—	—	—
22	1	木製品	机	SA24	第21回の木机4.4 角断面、角材状	長さ：35.2	幅：9.4	厚さ：6.4	—	—	—
22	2	木製品	机	SA24	第21回の木机4.12 角端が削れている。角材状	長さ：33.7	幅：6.2	厚さ：4.9	—	—	—
22	3	木製品	机	SA24	第21回の木机4.13 角断面、角材状	長さ：31.8	幅：4.6	厚さ：3.1	—	—	—
22	4	木製品	机	SA24	第21回の木机4.10 V字状に尖らせる。板材状	長さ：34.5	幅：8.0	厚さ：3.2	—	—	—
22	5	木製品	机	SA24	第21回の木机4.8 V字状に尖らせる。板材状	長さ：26.5	幅：9.4	厚さ：3.4	—	—	—
22	6	木製品	机	SA24	第21回の木机4.11 V字状に尖らせる。板材状	長さ：29.7	幅：5.9	厚さ：5.1	—	—	—
23	7	木製品	机	SA24	第21回の木机4.7 V字状に尖らせる。二角断面、板材状	長さ：30.3	幅：7.3	厚さ：3.5	—	—	—
23	8	木製品	机	SA24	第21回の木机4.5 V字状に尖らせる。二角断面、板材状	長さ：30.4	幅：6.5	厚さ：3.0	—	—	—
23	9	木製品	机	SA24	第21回の木机4.9 V字状に尖らせる。二角断面、板材状	長さ：33.0	幅：7.1	厚さ：3.2	—	—	—
23	10	木製品	机	SA44	第21回の木机4.3 V字状に尖らせる。二角断面、板材状	長さ：30.7	幅：5.0	厚さ：2.7	—	—	—
24	11	木製品	机	SA44	第21回の木机4.6 角断面、角材状	長さ：45.2	幅：4.1	厚さ：4.0	—	—	—
24	12	木製品	机	SA44	第21回の木机1.1 角端を尖らせる。円筒状	長さ：34.9	幅：6.6	厚さ：3.4	—	—	—
24	13	木製品	机	SA44	第21回の木机4.4 角から尖らせる。二角断面、角材状	長さ：36.1	幅：6.3	厚さ：3.7	—	—	—
24	14	木製品	机	SA44	第21回の木机4.3 V字状に尖らせる。二角断面、板材状	長さ：24.0	幅：5.5	厚さ：3.4	—	—	—
25	1	土師器	环	SK14	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り書道書き	13.0	5.4	3.2	0.42	40.0	11
25	2	木製品	机	SK14	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	長さ：22.9	幅：0.7	高さ：0.4	—	—	—
29	1	石器	石器	LN48	表面にも石材の特徴を多く残す。先端は尖端、右翼・辺縁直立	長さ：(6.0)	幅：4.1	厚さ：1.2	重量：28.0g	14	—
29	2	土師器	环	LN-LM1	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	13.1	4.7	4.7	0.36	35.9	—
29	3	土師器	环	LM53	外面：ロクロナデー、内面：ロクロナデー、直線・理屈・無理筋の中空	—	5.5	(2.0)	—	—	—
29	4	土師器	环	LM54	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	4.6	(2.3)	—	—	—
29	5	土師器	环	LN54	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	5.0	(1.9)	—	—	—
29	6	土師器	环	LO49	外面：ロクロナデー・回転糸切り・砂留めや多孔、隠匿灰	—	6.6	(2.7)	—	—	—
29	7	土師器	环	LO51	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	5.6	(3.2)	—	—	—
29	8	土師器	环	LO53	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	6.0	(2.7)	—	—	—
29	9	土師器	环	LN-KS	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	5.8	(1.4)	—	—	—
29	10	土師器	环	LN-LM5	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	11.0	6.0	4.1	0.55	37.3	—
29	11	土師器	环	LN-LM5-1	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	5.0	(1.6)	—	—	—
29	12	土師器	高台付环	LN-LM5-2	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	6.6	(3.5)	—	—	—
30	13	土師器	粗面高台付	LN49	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	7.5	(2.0)	—	—	—
30	14	土師器	粗面高台付	LN50	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・回転糸切り	—	6.0	(2.0)	—	—	—
30	15	土師器	粗面高台付	LR44	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：隠匿灰、砂留め	—	8.8	(3.0)	—	—	—
30	16	土師器	高台付环	LL83	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台、内面：ミガキ・黑色施釉	—	7.3	(2.7)	—	—	—
30	17	土師器	高台付环	LM49	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台へ切り・高台、内面：黑色施釉	—	7.4	(2.0)	—	—	—
30	18	土師器	环	LN56	外面：ロクロナデー、内面：ロクロナデー・砂留めや多孔	—	—	—	—	—	—
30	19	土師器	环	LN57	外面：ロクロナデー、内面：ロクロナデー・砂留めや多孔	—	—	—	—	—	—
30	20	土師器	环	LN58	外面：ロクロナデー、内面：ロクロナデー・砂留めや多孔	—	—	(9.8)	—	—	—
30	21	土師器	环	LN59	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・砂留めや多孔	—	6.2	(2.2)	—	—	—
30	22	土師器	环	LN60	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー・砂留めや多孔	—	7.8	(3.0)	—	—	—
31	23	漆器	环	LN52-1	外面：ロクロナデー・回転糸切り・砂留めや多孔	13.8	7.6	3.9	0.55	28.3	11
31	24	漆器	环	LN47-1	外面：ロクロナデー、底面：ミガキ・黑色施釉	—	7.0	(1.6)	—	—	—
31	25	漆器	环	LN47-2	外面：ロクロナデー、底面：ミガキ・黑色施釉	—	7.8	(2.7)	—	—	—
31	26	漆器	环	LP50	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー	—	7.6	(2.6)	—	—	—
31	27	漆器	高台付环	LN-LM51	外面：ロクロナデー・回転糸切り、内面：ロクロナデー	—	8.5	(4.3)	—	—	11
31	28	漆器	高台付环	LN50+MA43	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台へ切り、高台、内面：ロクロナデー	—	8.0	(2.0)	—	—	—
31	29	漆器	高台付环	LN51+MA43	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台へ切り、内面：ロクロナデー	—	—	(1.9)	—	—	—
31	30	漆器	高台付环	LN55+MA43	外面：ロクロナデー・回転糸切り・高台へ切り、内面：ロクロナデー	—	6.2	(4.4)	—	—	11
31	31	漆器	漆	LM51+LN55+LN56+LN56+修上	外面：タキモノ・カキモノ、内面：アメ具皿 直径33+34.2cm個体	—	—	—	—	—	12

遺構番号	番号	種別	器種	出土位置	特徴	口径(cm)	底径(cm)	高さ(cm)	底径指数	高径指数	面積(㎡)
32	32	須恵器	壺	LM8+K56+LM53+54+55+56+LN49+54+55+56+LP96+61+2.土上	外面：タタキ目・力引目、内面：アテ具痕 丸底	20.3	—	45.7	—	225.1	12
32	33	須恵器	壺	LM1+LN1+LN2	外面：タタキ目・力引目、内面：アテ具痕 同一個体	—	—	—	—	—	—
33	34	須恵器	壺	LM4+LN47+49+54+55+56+LN3+55+56	外面：タタキ目・力引目、内面：アテ具痕 同一個体	—	—	—	—	—	12
33	35	須恵器	壺	LN55	外面：タタキ目・数条の横目？、内面：アテ具痕	—	—	—	—	—	12
33	36	須恵器	壺	LM49+LN60	外面：タタキ目、内面：アテ具痕 色調は赤褐色を呈する。焼成不均と見られる	—	—	—	—	—	12
33	37	須恵器	壺	LN54+LP51+56	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	—	—	—	—	—	—
34	38	須恵器	壺	LO49+54+56+57+1.瓶部	外面：タタキ目、内面：アテ具痕	—	—	—	—	—	—
34	39	須恵器	壺	LN53+LN54+LM51+52+LO49+56	外面：タタキ目、内面：アテ具痕 並40同じ個体	—	—	—	—	—	—
34	40	須恵器	壺	LO50+51+2.瓶	外面：タタキ目、内面：アテ具痕 並39同じ個体	—	—	—	—	—	—
34	41	須恵器	壺	LN54+LN55+52+53+54+55+56	外面：タタキ目・力引目、内面：アテ具痕 並42同じ個体	—	—	—	—	—	—
35	42	須恵器	壺	LP54+MH46	内面：タタキ目・力引目、外側：アテ具痕 半径上側部、縫隙多	—	—	(9.1)	—	—	12
35	43	須恵器	壺	LN55	内面：数条の横目？、内面：アテ具痕・キリ目	—	—	—	—	—	12
35	44	須恵器	壺？	LO55	外側：ロクナナデ・凹窓入り・力引目、内面：ロクナナデ	—	9.6	(4.5)	—	—	—
35	45	須恵器	壺	LN56	外側：ロクナナデ・凹窓入り・力引目、内面：ロクナナデ 並内側部が赤褐色を呈し施瓦不良	—	8.8	(1.5)	—	—	—
35	46	須恵器	壺	ME42	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ、底面：有目 並内側部に白目地、底面に朱色斑点、底面研磨使用	—	14.0	(3.7)	—	—	—
35	47	須恵器	転用瓶	LN52+LP98	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ、底面：有目 並内側部に白目地、底面に朱色斑点、底面研磨使用	—	11.5	(3.5)	—	—	13
35	48	須恵器	壺	MA44	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ 並外側部に自然縫隙	—	13.6	(3.0)	—	—	—
35	49	須恵器	壺	MB44	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ 並外側部・縫隙部に突起が認められる。内面に自然縫隙	—	—	(8.5)	—	—	—
35	50	須恵器	壺	MC43	外面：タタキ目・ロクロ調査、内面：ロクロナナデ	—	—	(10.3)	—	—	12
36	51	須恵器	壺	LN47	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ 並外側部に自然縫隙	—	—	—	—	—	—
36	52	須恵器	壺	LN51	外側：ロクナナデ 並外側部に自然縫隙	—	—	—	—	—	—
36	53	須恵器	長持瓶？	LN51+LO48	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ 並外側部に自然縫隙	—	—	—	—	—	—
36	54	須恵器	長持瓶	LN49	外側：ロクナナデ 並外側部に自然縫隙	—	—	(6.4)	—	—	—
36	55	須恵器	壺	LN54	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ 並外側部・縫隙部に突起があり。内面に自然縫隙	—	—	—	—	—	—
36	56	須恵器	壺	LN46+1.縫上	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ 並外側部に自然縫隙	—	—	—	—	—	—
36	57	須恵器	壺	LO45	外側：ロクナナデ、内面：ロクナナデ 並外側部に自然縫隙	—	—	—	—	—	—
36	58	土製品	土管	LO17+LP48	内面：ロクナナデ、外側：ロクナナデ 並外側部にはリング状	—	—	—	—	—	—
37	59	木製品	火被板	LN47	上端下端に縫合跡	—	—	—	—	—	—
37	60	木製品	火被板	LO47	上端下端に縫合跡	—	—	—	—	—	—
37	61	木製品	火被	LN48	右足部・一部欠損、表面に施けこげ痕	—	—	—	—	—	—
37	62	木製品	火被	LN48	右足部・一部欠損	—	—	—	—	—	—
37	63	木製品	火被	LM47	上端下端に縫合跡	—	—	—	—	—	—
37	64	木製品	木製脚	LL53	無い板、半円形で残っている。右先	—	—	—	—	—	—
37	65	木製品	木櫃	LN46	板間に縫合跡。右下部、右孔	—	—	—	—	—	—
37	66	木製品	曲木脚	MB43	板間に縫合跡。左下部	—	—	—	—	—	—
37	67	木製品	木櫃	LN48	縫合部のケビキあり	—	—	—	—	—	—
37	68	木製品	木櫃	LN57	縫合部のケビキあり	—	—	—	—	—	—
37	69	木製品	木櫃	LN57	縫合部に切欠き込みがあり。加工途中に施瓦される	—	—	—	—	—	—
37	70	木製品	木製火被	LS44	下部に火被穴・切欠	—	—	—	—	—	—
37	71	木製品	木製火被？	LN48	木被1.木被2	—	—	—	—	—	—
37	72	木製品	木被	LN52	右孔	—	—	—	—	—	—
37	73	木製品	浮子	LN47	下部断錐、下端硝頭出し	—	—	—	—	—	—
37	74	木製品	木製脚	LN53	木被2下部に下らせる。上部硝頭、下部に4枚切込みおり	—	—	—	—	—	—
38	75	須恵器	刀子	LO56	ほぼ直線でついている。軸に径5mm程の孔がある	—	—	—	—	—	—
38	76	須恵器	刀子	LO47	刀部反曲欠損、圓錐・部脚	—	—	—	—	—	—
38	77	須恵器	神の御製品	LN51	全体に赤鉛が生じており、施作不明	—	—	—	—	—	—
38	78	須恵器	神の御製品	LN53	赤鉛が生じており、施作不明	—	—	—	—	—	—
38	79	須恵器	鉈	LN55	上面に施瓦・一面に施瓦が付いている。表面が緩やかかな丸みを帯びていて、無刃部の修理	—	—	—	—	—	—
38	80	須恵器	鉈	LN47	上面に中央部分がやや伸び、全体的に赤鉛が生じている。無刃部の修理	—	—	—	—	—	—
38	81	須恵器	鉈	LN54	上面に幅1~1.5cm前後の単位で流れる赤鉛洋片。表面に保付着	—	—	—	—	—	—
38	82	須恵器	鉈	LN54	上面にやや火被1単位で、その下側は無1単位で面脚付されている。無刃部の修理	—	—	—	—	—	—
38	83	須恵器	鉈	LN49	先端部が黒色ガラス	—	—	—	—	—	—
38	84	須恵器	鉈	LN52	外側に火被1.火被2.内面：ロクナナデ・脚付	—	—	—	—	—	—
38	85	須恵器	鉈	LN52+LM46+LP48	外面：タタキ目。内面：硝頭を撫で付けて調整？	—	—	—	—	—	—
38	86	須恵器	鉈	LN53+LO46+50	上面にタタキ目。内面：硝頭を撫で付けて調整？	—	—	—	—	—	—
38	87	須恵器	鉈	ME43	内面：ロクナナデ・凹窓切り・内面：ロクナナデ・外側に施瓦	—	—	—	—	—	—
38	88	鉈	宝鏡通鑑	LN50	初鋸は1630年で、北王明の時	—	—	—	—	—	—
38	89	鉈	洪武通鑑	MD41	初鋸は1368年で、明王明の時	—	—	—	—	—	—
38	90	鉈	洪武通鑑	LN53	初鋸は1368年で、明王明の時	—	—	—	—	—	—

第5章 自然科学的分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

上谷地Ⅱ遺跡では、古代の集落跡に伴う遺構が検出されており、遺構内から多数の木製品が出土している。今回の分析調査では、これらの木製品を対象として、木材利用を明らかにするために樹種同定を実施する。

1 試料

試料は、出土した木製品5点(No1-5)である。

2 分析方法

剃刀の刃を用いて木口(横断面)・柵目(放射断面)・板目(接線断面)の3断面の徒手切片を作製し、ガム・クロラール(抱水クロラール、アラビアゴム粉末、グリセリン、蒸留水の混合液)で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、その特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類を同定する。

なお、木材組織の名称と特徴は、島地・伊東(1982)、Wheeler他(1998)、Richter他(2006)を参考にする。また、日本産木材の組織配列は、林(1991)や伊東(1995,1996,1997,1998,1999)を参考にする。

3 結果

樹種同定結果を第5表に示す。木製品は、針葉樹1分類群(スギ)と広葉樹1分類群(クリ)に同定された。各分類群の解剖学的特徴等を記す。

・スギ(*Cryptomeria japonica* (L.f.) D. Don) スギ科スギ属

軸方向組織は仮道管と樹脂細胞で構成される。仮道管の早材部から晩材部への移行はやや急で、晩材部の幅は比較的広い。樹脂細胞はほぼ晩材部に認められる。放射組織は柔細胞のみで構成される。分野壁孔はスギ型で、1分野に2-4個。放射組織は単列、1-15細胞高。

・クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) ブナ科クリ属

環孔材で、孔團部は3-4列、孔團外で急速に管径を減じたのち、漸減しながら火炎状に配列する。道管は單穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列、1-15細胞高。

4 考察

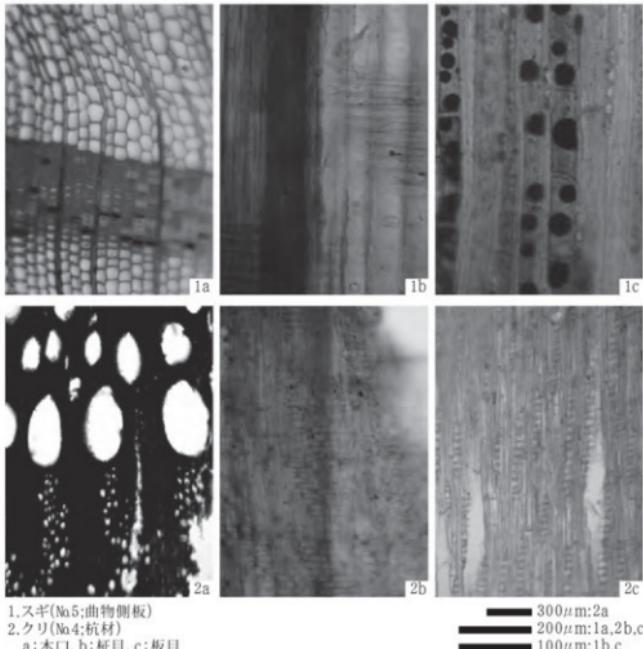
木製品は、曲物蓋・側板、板状材、箸、杭材がある。曲物蓋・側板は、針葉樹のスギである。スギは木理が通直で割裂性が高く、とくに板状の加工が容易であることから、曲物蓋・側板に利用されたと考えられる。板状材にスギが利用されているのも、スギの加工性を利用した結果と考えられる。箸は端材等で製作可能であり、他の木製品にも利用されているスギの余材等を利用して作られていることが推定される。板状の加工を施す曲物部材では、大見内遺跡などでもスギが利用された例が報告されている(パリノ・サーヴェイ株式会社,2004)。

一方、杭材は落葉広葉樹のクリである。クリは、強度・耐朽性に優れた材質を有しており、建築・土木材に有用である。また、二次林などに普通にみられる樹木であり、入手が容易で腐りにくいクリ材を杭として利用したことが推定される。

第5表 樹種同定結果

番号	遺構	器種	樹種
No.1	SD11	曲物蓋	スギ
No.2	SD11	板状材	スギ
No.3	SK14	箸	スギ
No.4	SA44	杭材	クリ
No.5	MB43	曲物側板	スギ

木材



1.スギ(№5;曲物側板)
2.クワリ(№4;杭材)
a:木口, b:柾目, c:板目

300μm:2a
200μm:1a,2b,c
100μm:1b,c

第39図 自然科学的分析写真

引用文献

- 林 昭三,1991,日本産木材顕微鏡写真集,京都大学木質科学研究所。
- 伊東隆夫,1995,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ,木材研究・資料,31,京都大学木質科学研究所,81-181。
- 伊東隆夫,1996,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ,木材研究・資料,32,京都大学木質科学研究所,66-176。
- 伊東隆夫,1997,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ,木材研究・資料,33,京都大学木質科学研究所,83-201。
- 伊東隆夫,1998,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ,木材研究・資料,34,京都大学木質科学研究所,30-166。
- 伊東隆夫,1999,日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ,木材研究・資料,35,京都大学木質科学研究所,47-216。
- バリノ・サーゲイ株式会社,2004,木製品の樹種同定,「大見内遺跡県営は場整備事業(館合地区)に係る埋蔵文化財発掘調査報告書」,秋田県文化財調査報告書第374集,秋田県教育委員会,83-84。
- Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E. (編),2006,針葉樹材の識別 IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東 隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部久・内海泰弘(日本語版監修),海青社,70p. [Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.(2004) *IAWA List of Microscopic Features for Softwood Identification*] .
- 島地 謙・伊東隆夫,1982,図説木材組織,地球社,176p.
- Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E. (編),1998,広葉樹材の識別IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト,伊東隆夫・藤井智之・佐伯浩(日本語版監修),海青社,122p. [Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.(1989) *IAWA List of Microscopic Features for Hardwood Identification*] .

第6章　まとめ

上谷地Ⅱ遺跡は仁賀保丘陵地が東に迫る象潟泥流台地上の北端に立地する。北1.5kmほどに日本海が迫り、周間に小高い泥流丘が点在する水田地帯にある新発見の遺跡である。試掘や範囲確認調査の結果から東に隣接する上谷地Ⅰ遺跡から西隣の新脇田遺跡にかけて旧地形は泥流丘の存在も含めて大きく波打っており、丘と丘の間には深く泥炭の溜まる地名通りの谷地が広がる沼沢地であった。調査区中央北側に現在は失われている泥流丘がかつてあり、東側でも泥流丘が隣接しており、本遺跡はその2つの丘に挟まれたやや高台の部分であった。

調査の結果、第Ⅳ層面から、主に平安時代の遺構・遺物を検出した。中央の農道を境に東側では南北方向に縱断、西側では東西方向に横断し途中南側へカーブする溝遺構があり、多くの遺物が出土した。水性堆積の様子が土層から窺え、西側のS D11には柵の構造物も見られることから用水路として利用していたものと考える。その水場に儀礼なのか単に廃棄したのか、遺物が投げ込まれていた様子である。出土遺物の様子から2本の溝に時期差は見られない。水田の造成時に大きく削平を受けており、遺構の残りは悪く当時の地表面は残っていない。多くの遺構の出土は砂質なのだが、現在周囲に同様の土は見受けられない。東側溝跡の東隣に2間×2間ほどの掘立柱建物跡が1軒あり、周囲に集落があったことを窺わせる。象潟泥流台地は粘土質のため水はけが悪く、調査時も雨が降るとすぐに池になるほどであった。このような水はけの悪い土地では、竪穴式住居では都合が悪いであろう。近隣の同時代の平地にある遺跡の立沢遺跡と同じく掘立柱による平地式住居の集落であった可能性を考えられる。土坑に関しては、遺物もほとんど出土せず、形状も不整形のため利用方法は不明である。

出土遺物は縄文時代や中世以降のものも若干含むが、大半は平安時代のものである。土器の特徴を見てみると、須恵器の环は9割方クロ成形の回転ヘラ切りで切り離されており外傾が緩やかであるのに対し、土師器の环は回転糸切りの切り離しで底形が小さく器高が高いものがほとんどである。須恵器の甕・壺は大型でタタキ目のあるものが多く、胎土や内面のアテ具痕の違いから数種類が確認できる。土師器の甕の出土は少なかったが、破片を見るとロクロ使用のものが主流であるようだ。砲弾型底部を持ち、外面にタタキ目を持つ土師器甕も出土している。墨書き器が4点、ヘラ記号をもつ土器も2点出土している。これらの特徴から本遺跡は9世紀前半から10世紀ごろの集落と思われる。破片ではあるが楕扁が出土しており、墨書きの存在を含めて近隣に律令と関わる集落の存在を窺わせる。

旧仁賀保町における低地での発掘調査はまだ数が少ない。昭和54年に調査が行われた立沢遺跡、平成20年調査の前田表Ⅱ遺跡の2遺跡のみで、象潟泥流台地上ではほぼ初めての調査となった。これらの遺跡の出土遺物を見比べるとよく似ており、若干の時期差はあるがほぼ同時代の古代の遺跡であろう。いずれからも墨書き土器が出土しており関連が想起される。周囲の仁賀保丘陵には古代から中世の遺跡が点在しており、古代には高台での集落が主流であると考えられていたが、この仁賀保の3つの遺跡、ともに竪穴住居は検出されず、集落の中心部分を調査したものではない事を考えると、さらに規模の大きな掘立柱建物跡による集落が、にかほの低地に残されている可能性が高いと思われる。

引用・参考文献

仁賀保町教育委員会『下岩ノ沢遺跡発掘調査報告書』1986(昭和61)年

仁賀保町教育委員会『立沢遺跡発掘調査報告』1987(昭和62)年



上谷地II遺跡全景（北→）



上谷地II遺跡全景（真上から）



基本土層（調査区中央北端 B - B' 東→）



SB 20 完掘（西→）



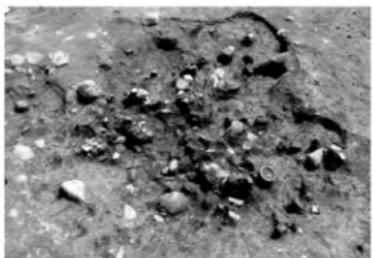
SD 11 完掘（西→）



SD 11 遺物出土状況



SD 11 内杭列・柵（南→）



SD 17 遺物出土状況



SA 44 杭材出土状況



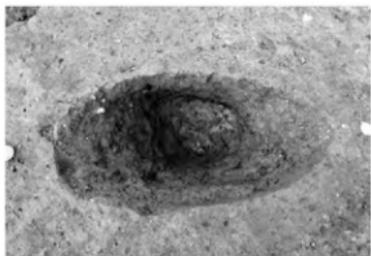
S D 17 完掘 (北→)



S A 44 半裁 (東→)



SK 12 半裁狀況（南→）



SK 13 完掘（南→）



SK 14 完掘（北→）



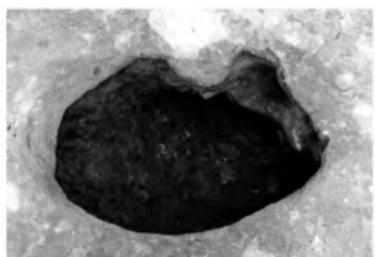
SK 16 半裁斷面（西→）



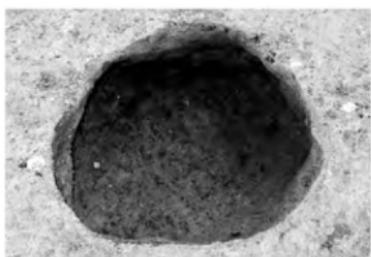
SK 19 半裁斷面（南→）



SK 28 半裁狀況（西→）



SK 37 完掘（南→）



SK 43 完掘（東→）



第10圖 1



第10圖 2



第10圖 3



第10圖 4



第10圖 5



第10圖 6



第10圖 7



第10圖 8

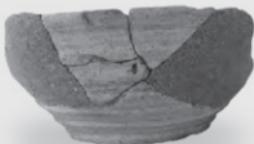
S D 11 出土遺物 (1)



第11圖9



第11圖10



第11圖11



第11圖12



第11圖20



第11圖21

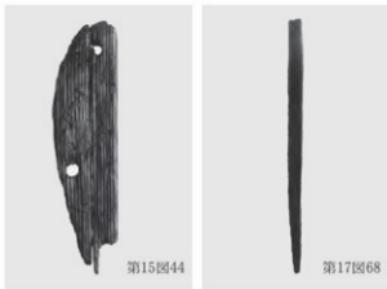
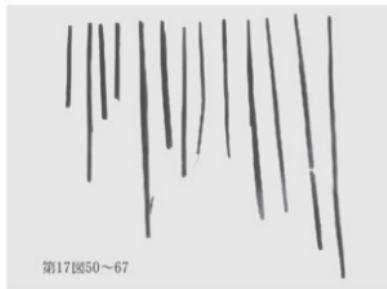
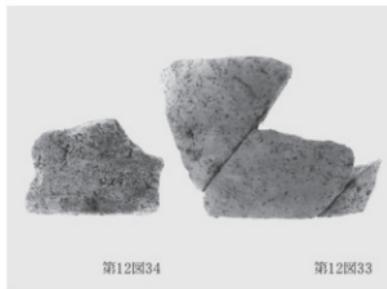
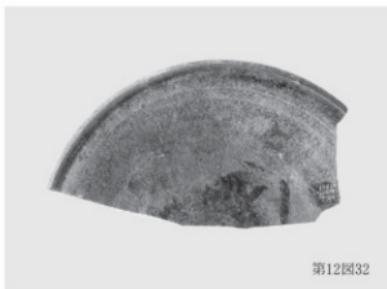


第11圖26



第12圖28

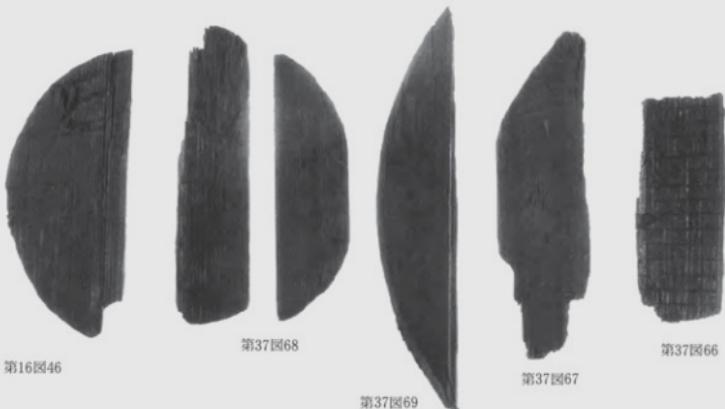
S D 11 出土遺物 (2)



S D 11 出土遺物 (3)



第16圖48



第16圖46

第37圖68

第37圖69

第37圖67

第37圖66



第18圖 1



第18圖 2



第18圖 3



第18圖 4



第18圖 6



第19圖 7



第19圖 11



第19圖 13



第19図16



第19図19



第19図20



第25図 1



第31図23



第31図27



第31図30



第31図30底面



第30图20



第30图19



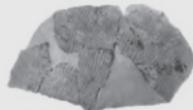
第30图22



第32图32



第31图31



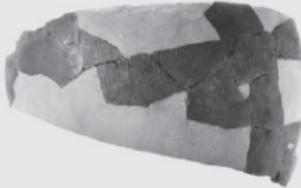
第33图36



第33图35



第35图42



第33图34

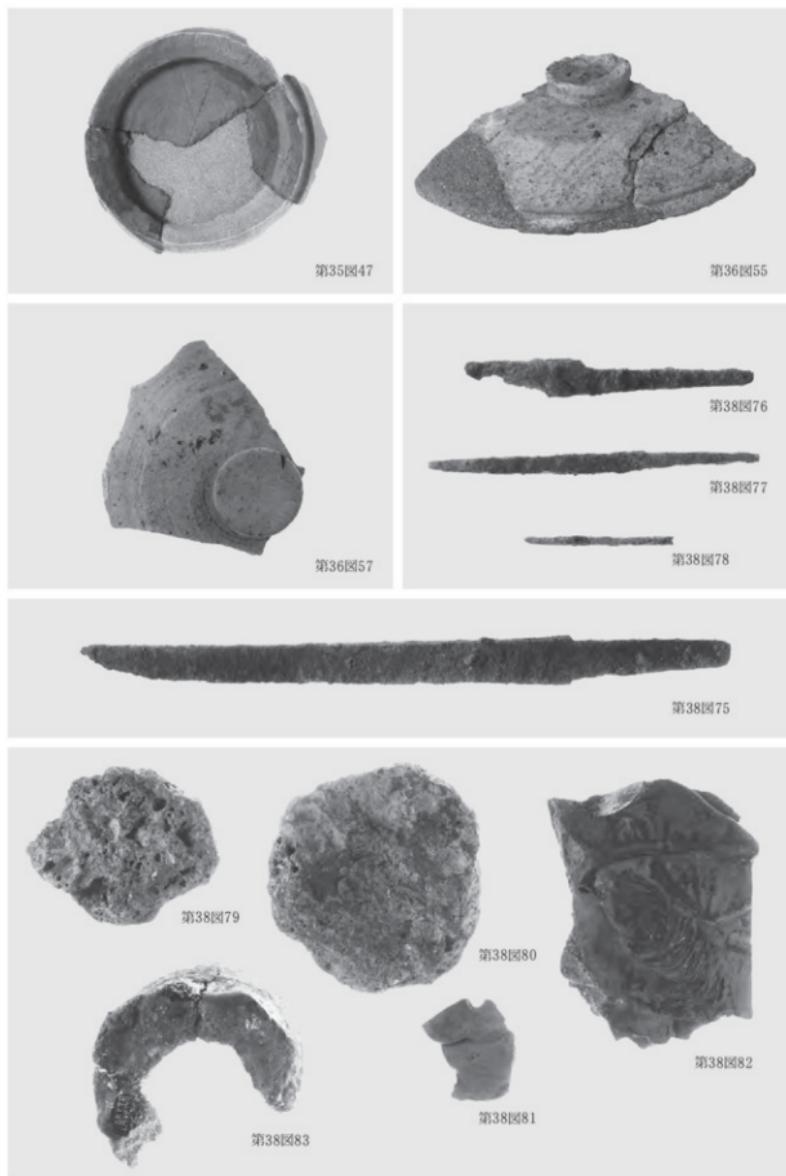


第35图43

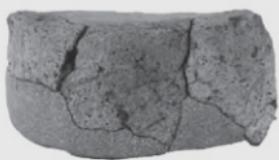


第35图50

遺構外出土遺物（2）



遺構外出土遺物（3）



第36圖58



第38圖84



第29圖1



第37圖65



第37圖73



第37圖64



第37圖62裏



第37圖61表
第37圖62表



第37圖72



第37圖71



第37圖60



第37圖59

遺構外出土遺物（4）

報 告 書 抄 錄

秋田県文化財調査報告書第461集

上 谷 地 II 遺 踪

－一般国道7号象潟仁賀保道路建設事業に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書I－

印刷・発行 平成22年7月

編 集 秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話(0187) 69-3331 FAX(0187) 69-3330

発 行 秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話(018) 860-5193

印 刷 株式会社 三森印刷

